第一章　海外事例から導く魅力向上要件の抽出

公園緑地の観光に資する魅力向上に資する要件を導くためには、先進事例が有する要件から導くことが考えられる。そこで、観光的魅力に加え、公園の面積や立地、施設構成等から判断される特徴をもとに分類を行い、表 1-1 のように観光上の先進事例として 7 つのタイプから 8 公園を選定し、それらの魅力に係る詳細調査を実施したところであるが、これらの海外の代表公園事例から、観光上、公園の魅力となっている要件を抽出し整理するものとする。

なお、下記表 1-1 中の「タイプ」欄は、公園緑地を分類して 7 つの区分を設定したものであり、本区分に基づいて海外公園の代表事例をタイプ毎におおむね 1 公園（タイプⅦのみ 2 公園）を選定している。

表 1-1　海外の代表公園事例

タイプ	公園名	所在都市	所在国
Ⅰ：広大な自然体験型公園	スタンレーパーク	バンクーバー市	カナダ
Ⅱ：広大な都市のオアシス（面積 50ha 以上）	セントラルパーク	ニューヨーク市	米国
Ⅲ：都心の小規模なスポット（面積 10ha 以上）	ミレニアムパーク	シカゴ市	米国
Ⅳ：遊歩道公園	ハイライン	ニューヨーク市	米国
Ⅴ：施設複合型公園	サウス・バンク・パークランズ	ブリスベン市	オーストラリア
Ⅵ：歴史的公園	リュクサンブール公園	パリ市	フランス
Ⅶ：テーマ特化型公園	シンガポール植物園	タングリン市	シンガポール
	メルボルンの王立植物園	メルボルン市	オーストラリア

最初に、上記表に記された代表公園事例から、それぞれの公園が有する魅力にかかる要素（項目）を抽出するものとする。次頁以降に、表 1-1 の各公園の概要を掲載し、その概要の末尾に魅力に係る主な要素項目を抽出した。これらの要素と各事例の詳細情報から、公園緑地の魅力向上に係る要件を導くものとする。

タイプⅠ　広大な自然体験型公園

スタンレーパーク

（所在地） カナダ、バンクーバー市
（面積） 400ha
（所有者） バンクーバー市
（管理団体） バンクーバー・ボード・オブ・パークス・レクリエーション
（設置経緯）

バンクーバーの市街地の先に飛び出した半島の先端に位置するため、19 世紀には、軍事上の重要性が指摘されていた場所である。その場所が、1888 年に公園として開園し、その後、当時カナダの総督だったダービー･スタンレー16 世にちなんでスタンレーパークと名づけられた [1)]。総面積 400 ha の広大な公園であり、日本では都市公園というより自然公園に分類される規模である。

※公園位置図のベース図は、著作権フリーのオープンストリートマップ
https://openstreetmap.jp/map#zoom=13&lat=49.29127&lon=-123.14515&layers=FB00F

図 1-1　スタンレーパークの位置図

（公園の立地条件）

バンクーバーに市内におけるスタンレーパークの位置を示した図 1-1 中の赤丸は、スタンレーパークの最寄駅と、その徒歩圏域（500m 範囲円）を示している。最寄駅から徒歩で到達するのは難しいが、ダウンタウンからスタンレーパーク行きのバスが通っているので、公共交通機関によって公園まで行くことは可能である。

（公園の特徴）

スタンレーパークは、自然度の高い大自然を有していることが最大の特徴であり、樹林の中には、高さが 100 m もある針葉樹も生育する。カナダは、大自然を有する広大な国土を有する国であるが、その国を代表する自然が、都市の市街地に接して存在し、ごく身近で利用ができるというのが本公園の魅力であると考えらえる。そして、公園の施設は　その自然の保全とその自然を享受できる内容の施設が配されていることも、公園の魅力の増進につながっているものと考えられる*。

自然度の高さを活かした施設として、海沿いを周遊する遊歩道（シーウォール）やビーチ、森林があり、それでいてミニゴルフコース・テニスコート、プールなどの運動施設も充実し、水族館のような教養施設もある。さらに、カフェ・レストランなどの便益施設が整い、園内を楽しく巡るためのミニチュア鉄道や馬車のツアーもあるなど、様々な施設が充実していることが特徴である。かつては動物園もあったようだが、野生動物保護団体の反対などによって閉鎖となった経緯がある[1)]。

（園内の主な施設）

大きな森に覆われた広大な自然公園であるスタンレーパークの海沿いの外周には、公園をぐるりと一周する約 8.8 km の遊歩道（シーウォール）が整備されている。公園利用者のおよそ 9 割がこのシーウォールを利用している*。他には、かつて先住民の居留地だったことを示す 7 つの部族のトーテムポールや、カナダ国内で最初に開館した国内最大の一般向け水族館であるバンクーバー水族館がある。1964 年に世界で最初にオルカの飼育・展示を始め、他にもベルーガ、イッカク、イルカなどの飼育実績があるなど、北方の哺乳海洋生物を中心とした海洋保全、海洋生物の保護の研究を進めている[1)]。

（公園の運営管理及び利用促進上の取り組み）

・馬車ツアー：馬車による公園内のツアーが実施されている。ガイドによる詳しい説明を聞くことができ、約 1 時間で要所を巡るツアーである[1)]。

・情報提供：スタンレーパークの情報（公園利用案内やアクセス情報、イベント情報など）を記載したパンフレットを、ネットで公開するとともに、紙ベースのものを空港やフェリーターミナル、旅行センター、ホテル、所管の公園等に配られている*。

＊公園管理者（Vancouver board of park and recreation）への問い合わせ情報（2019.1）

・イベント開催：各種のフェスティバルやマラソン、ウォーキング大会などを含めて、年間平均66ものイベントが開催されている。スタンレーパーク125周年記念行事も企画されている*。

・スタンレーパーク・エコロジー・ソサエティの取り組み：スタンレーパークのフィールド活動を通じて、自然の大切さやその保全について学ぶ活動である[1)]。

（都市の観光動向、および観光ネットワーク形成における公園の役割）

公園利用者は週末利用が多く、また海外旅行者よりも国内旅行者の方が多い傾向にある。また、利用者のうちのおよそ9割が遊歩道（シーウォール）の利用者である。特にシーウォールの利用は自転車による利用が多く、市民の利用のうちおよそ半数が自転車利用である*。

バンクーバー市における観光のネットワーク上の観点からのスタンレーパークの意義は、次のように整理できる。そもそも、カナダ全域で言えることではあるが、バンクーバー市の良いところは、自然が豊かでそれが身近に存在することである。これだけの自然度の高い公園に、市街地から自転車でも到達可能で、マイカーやバスを利用すれば、市内のどこからでもアクセスしやすい。市民や観光客にとって、自然を満喫できる場として公園があり、その利用を目的とする利用者にとっては求心性がある施設と言える。つまるところ、スタンレーパークの魅力と観光上の意義は、自然と街が調和していることであり、それを如実に実感でき、かつ象徴的な場所がスタンレーパークだと言える。

（本公園の魅力に係る主な要素）

本公園の主な魅力は以下のものが挙げられる。

1．都市に残された最後の原生自然
2．原生自然を保全・活用した計画方針に基づいた自然に影響の少ない遊歩道（シーウォール）の整備
3．ミニゴルフやテニスなどの運動施設や水族館
4．ガイド付き馬車ツアーによる園内案内
5．自然を活かしたイベント（マラソン、ウォーキング等）の実施

〔参考文献・URL等の情報根拠〕

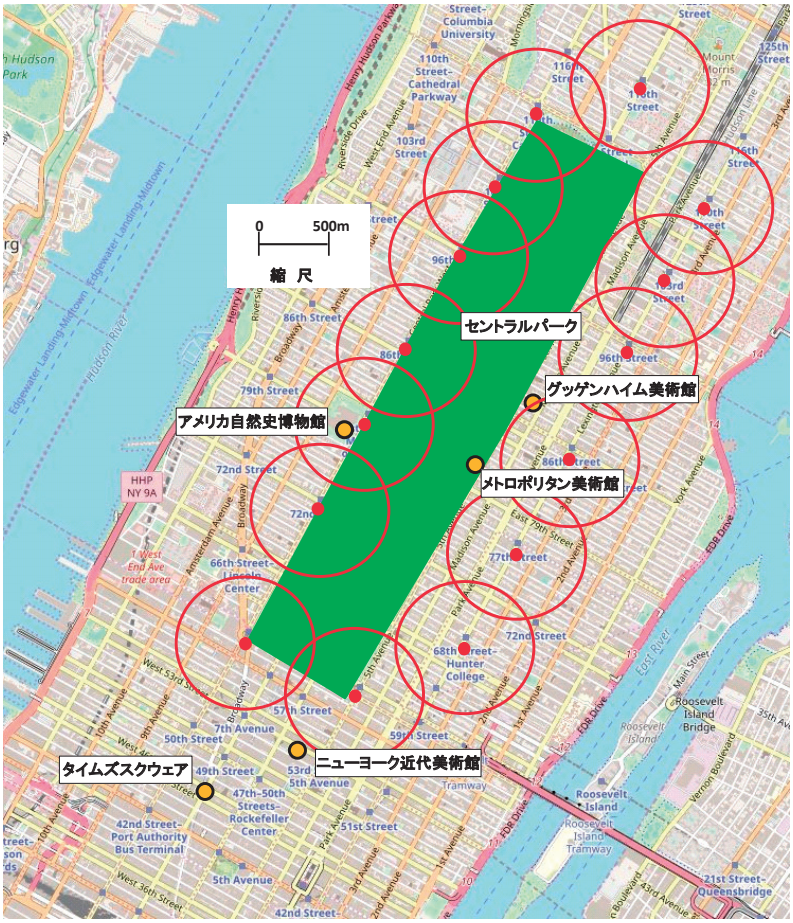
1） City of Vancouver の HP 〈https://vancouver.ca/default.aspx 参照日 2019.1.15〉

タイプⅡ　広大な都市のオアシス

セントラルパーク

（所在地） アメリカ、ニューヨーク市
（面積） 341ha
（所有者） ニューヨーク市
（管理団体） セントラルパーク・コンサーバンシー
（公園の整備経緯）

19 世紀前半にはニューヨーク市のマンハッタン島の市街地は、北へと拡大していった。こうした市街地の膨張に対して、パリのブローニュの森やロンドンのハイドパークのような、自然あふれる市民の憩いの場の確保が望まれるようになっていった。こうした市民ニーズを受ける形で、ニューヨーク州議会は現在のセントラルパークの地を 1853 年に公園用地として指定した。1858 年には、公園のコンペが実施され、ランドスケープアーキテクトのフレデリック・ロー・オルムステッドと、建築家のカルヴァート・ヴォークスによる設計案が採用され、その案に基づいてセントラルパークが 1873 年に開園した。セントラルパークは、今ではニューヨーク市の有数な観光地の一つであり、1962 年にはアメリカ合衆国の国定歴史建造物となっている[1)]。



※ベース図は、著作権フリーのオープンストリートマップ
https://openstreetmap.jp/map#zoom=14&lat=40.77849&lon=-73.97073&layers=FB00F

図 1-2　セントラルパーク周辺図

（立地条件）

公園はニューヨーク市のマンハッタン島のほぼ中央に位置し、長さ 2.5 マイル（4 km）、幅は 0.5 マイル（0.8 km）の長方形をなす。周辺図である図 1-2 中の赤丸は、最寄りのメトロ駅と、駅から 500m 圏域（徒歩圏域）を示している。本図からは、公園の広さがうかがえるとともに、

公園をとりまくように、地下鉄の多くの駅が存在していることが分かる。セントラルパークの東側中央には、ニューヨークの観光地として人気の高いメトロポリタン美術館が位置し、西には道をはさんでアメリカ自然史博物館があるなど、公園を中心に有数の観光スポットが点在する立地をなしている。公園から南下すれば、マンハッタン島の南端にたどり着き、自由の女神像を望める。公園の北側は一般にアッパーマンハッタンと呼ばれ、美術館が多く存在する地区でもある。

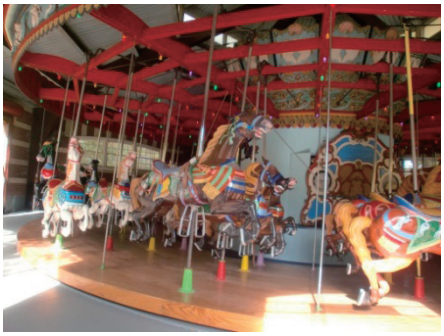
（公園施設内容とその特徴）

フレデリック・ロー・オルムステッドと、カルヴァート・ヴォークスは、セントラルパークの設計者であるが、彼らは、夏にはボートを浮かべ、冬にはアイススケートができるようにと、もともと沼地だったところを池に改造した。セントラルパーク・コンサーバンシーは、2012年に、このオルムステッドらの設計思想を反映させるために、園内に配置された池の護岸改修工事を行った。汀線を平均水位に合わせて調整し、かつ自然の岸辺に近い形状とし、野生の植生が復元されるようにした。

セントラルパークには、グレート・ローンを始め広大な芝生広場が配されている。こうした芝生広場では、毎年ニューヨーク・フィルハーモニックが屋外コンサートを開催し、メトロポリタン・オペラも公演を行う。また、メドウと呼ばれる牧草地が整備され、芝生広場のように、公園の利用者は穏やかにリフレッシュすることができる。

こうした都市のオアシスとしての施設以外にも、歴史的経緯から、様々な施設が設けられている。それらは、フランス式（北側円形庭園）、イタリア式（センター・ガーデン）、英国式（南側円形庭園）の三つの庭園が設けられているコンサーヴァトリー・ガーデンや、不思議の国のアリスに登場するアリスなどのキャラクターのブロンズ像もあり、子供に人気がある。他にも、ビートルズのジョン・レノンのメモリアル施設としてストロベリー・フィールドや、熱帯から北極圏に至る世界中から動物が集められているセントラルパーク動物園もある。
57 体もの木馬が廻る回転木馬は、1871 年からセントラルパークで営業している。公園で最も人気のある施設の一つである。イギリスの有名な戯曲家のシェイクスピアに

ちなんで、1913 年に造られた庭園がシェイクスピア・ガーデンである。イギリスの片田舎の風景を模したデザインの中に、花木や草花が多く植えられている。



公園内は自動車での通行が禁止されており、週末は、公園を囲む 9.7 km の園路はジョギング、サイクリング、インラインスケートを楽しむ人々などで賑わう。また、セントラルパークは、ニューヨークシティマラソンのゴール地点にもなっている*1。

（セントラルパークの魅力につながる公園のデザイン）

マンハッタン島は岩盤上にあるために、セントラルパークは、岩盤をダイナマイトで崩しながら整備した公園である。人工的に造られた公園にもかかわらず、公園のほとんどが自然に見えるのは、元からあった湖や沼など巧みに使って、より自然に近い地形をデザインし、かつ適切な植栽計画によるものである。また、道路は景観を崩さないために人工的に窪地に造られているなど、人工物が目に入らないような工夫もある。こうしたデザインによって、公園内はまるで天然自然の中にいるように錯覚する風景を現出し、都会的な景色や喧噪の中のオアシスとしての働きを果たしている。また、広大な都会の自然地のため、渡り鳥たちのオアシスにもなっており、バードウォッチングも盛んに行われている。このため、公園に面してセントラルパークが眺められるアパートメント・コンドミニアムは、近隣の中でも高く評価される物件となっている[2)]。

（セントラルパークの運営管理）

セントラルパークでは、その運営管理はコンサーバンシーと呼ばれる NPO によって実施されている。本団体は、市から毎年管理委託料を受け取るとともに、一般企業や個人からの寄付金や施設使用料、それに園内におけるカフェや売店等の収益施設の収入などを財源として公園の運営を行っている組織である。

深刻だったニューヨーク市の財政難の解決策として、セントラルパークの運営管理を 1980 年度からセントラルパーク・コンサーバンシーと委託契約を結んだことが嚆矢となり、その後は、本手法が成功したことにより、米国の大都市における主要な公園は、こうしたコンサーバンシーが運営管理を実施するようになっていったという実情がある。

セントラルパーク・コンサーバンシーは、寄付金が重要な位置を占めているが、マンハッタンの中心部は金融をはじめとしたビジネスが集中する地域であり、経済力が高く高所得者が多く住む地域でもある。こうした地域において、知名度が高く市民の関心の高い公園には寄付金は集まりやすい。米国では、人種や所得などの社会階層の似た者が集まる傾向があるため、低所得者が集まる地域では寄付を募ることが難しくなる。特に、公園という施設は必ずしも歓迎されるものばかりではなく、麻薬の売買の場となることもあることから、地域によっては逆に迷惑施設とみ

＊1:公園管理者（Central park Conservancy 及びニューヨーク市公園レクリエーション部局）への問い合わせ情報（2019.2）

なされることもあるようである。よって、寄付行動は、企業や個人の価値観とともに、都市を取り巻く環境に大きく左右され、それが最も成功した事例がセントラルパークと言える*2。

広大なセントラルパークの維持管理には年間約 2700 万ドルもの経費が必要であり、セントラルパーク・コンサーバンシーはこのうちの約 85%を寄付金やイベント等の利用料収入によってまかなわれている[2)]。

以上のように、セントラルパークは、ニューヨーク市マンハッタン島のスプロール化防止と都市にとって貴重な自然を担保することを目的として造られ、その目的に沿って、自然豊かな都会のオアシスとして機能するようデザインされている。そして、開園以来およそ 150 年が経過し、その間に公園施設が暫時追加され、それが歴史となって積み重なっていることがセントラルパークの魅力と言える。

（ニューヨーク市全体の観光ネットワークの形成とセントラルパークとの関係）

セントラルパークはニューヨーク市への観光振興に大きく寄与しており、周遊という観点からは、観光客は通常はセントラルパークを見学した後に、近くの博物館等（アメリカ自然史博物館やグッケンハイム美術館など）を訪れる。また、人気のタイムズスクウェアも近い。

なお、セントラルパークは、ニューヨークマラソンのようなイベントを除けば、他の観光施設との連携は特に実施されていないが、周辺の博物館や美術館との情報共有は行われている*1。

セントラルパークは、もともと先述したように、都市の骨格として中央に広大な緑地を設けたものであり、およそ 150 年もの長い歴史の中で、公園をとりまいて高級住宅が張り付き、それに伴って博物館や美術館などの観光施設が張り付いてきた。その結果、セントラルパークとこれらの施設を周遊する効果が生み出されている。セントラルパークの主な効果は、都市の中心に自然環境を担保することによって、市民のオアシスとして機能することではあるが、観光という観点からしても、観光ネットワークの中心として機能していることがうかがえる。

（本公園の魅力に係る主な要素）

１．大都市の中心にある広大な自然地で、都市のスプロール化防止を図る広大な緑地空間
２．池、広場等の新たに人工的に自然景観を作り上げたデザイン
３．歴史のある各種施設（回転木馬、水族館など）の存在
４．近隣の博物館との情報共有
５．黎明期の都市の発展の過程で、早期に中心に自然空間ができたことによる、公園周辺の良好な市街地の形成

〔参考文献・URL 等の情報根拠〕

1)Central park Conservancy の HP　〈http://www.centralparknyc.org/ 参照日 2019.1.20〉
2）ニューヨーク市における公園緑地の民間管理の現状と課題（田島夏与）2010 年、立教経済学研究第 63 巻第 3 号，51-69

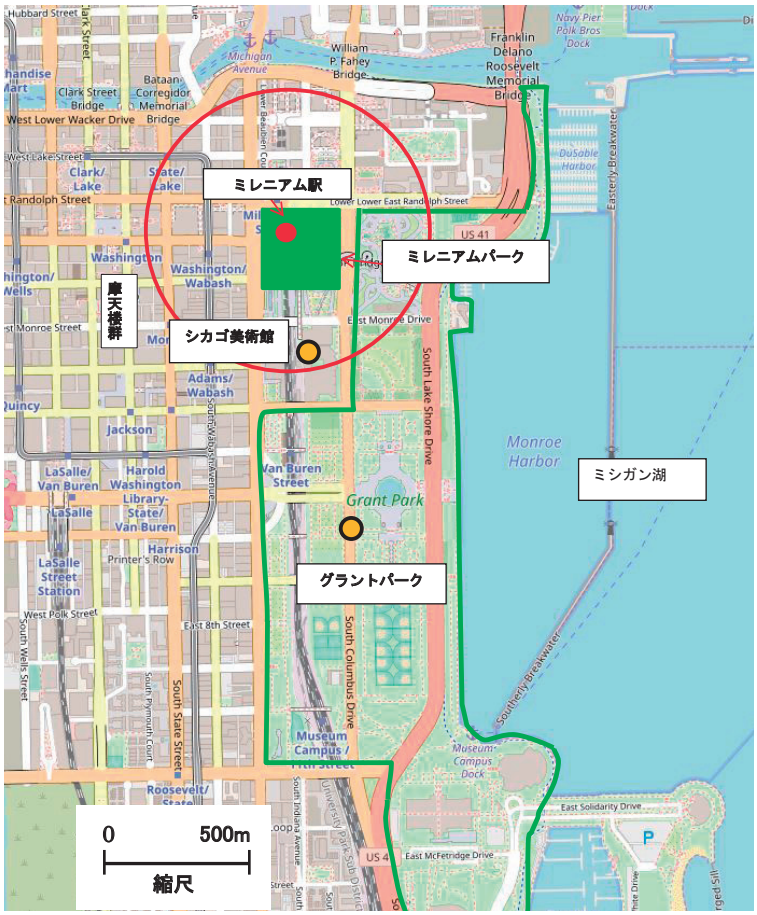
＊2：立教大学田島夏与教授へのヒアリング情報（2019.1）

タイプⅢ　都心の小規模なスポット

ミレニアムパーク

（所在地） アメリカ、シカゴ市
（面積） 9.9 ha
（所有者） シカゴ市
（管理団体） ミレニアムパーク財団
（公園設置経緯）

当該箇所は、もともと鉄道用地だった場所であり、そこが砂利敷きの駐車場として暫定利用されていたが、この鉄道用地の所有権がシカゴ市に残っていたことが判明したことがミレニアムパーク建設の契機となった。シカゴ市は、市の中心に残った遊休地の地下に、地下鉄駅・バスターミナル・駐車場を設け、駐車場収入等によって公園の運営を行うという事業の基本スキームを立てた。そのスキームの骨子は、納税者の負担なしで公園を整備するというものであり、①シカゴ市の発行する市債によって地下駐車場を建設し、駐車場収入によって市債を償還する。②地上部の公園部分は、民間からの寄付によって全ての建設費をまかなうという方針が立てられた。



※公園周辺図のベース図は、著作権フリーのオープンストリートマップ https://openstreetmap.jp/map#zoom=15&lat=41.87766&lon=-87.61884&layers=FB00F

図 1-3　公園周辺図

寄付金の目標額は当初 3,000 万ドルと設定されたが、最終的には 1 億 2,500 万ドルまで引き上げられ、総事業費 4 億 7000 万ドルにも及ぶ巨費を投じてわずかな整備期間を経て 2004 年に供用された。市の中心地という一等地に残された貴重なリザーブ用地を公園化して、新たな観光拠点を作り上げた成功事例である[1]。

（立地条件）

シカゴ市の中心市街地で、摩天楼の高層ビルが建ち並ぶループエリア内に立地する(図 1-3)。公園の地下に鉄道駅やバスターミナル、駐車場といった交通結節機能を設けているため、その立地のみならず、交通の便は良い。

（公園の施設内容）

本公園の面積は、東京の日比谷公園のわずか 3 分の 2 ほどしかないが、園内のパビリオンは、著名な建築家や芸術家が手掛けた象徴的なものばかりであり、2000 年代においてシカゴで最も集客力のある施設となった。

それぞれのパビリオンは、例えば、マコーミック・トリビューン財団の寄付によって整備されたアイススケートリンク、シカゴの企業家 Jay Pritzker の寄付による野外コンサート会場、通信会社の AT&T の寄付によるステンレス板による卵型のモニュメント「The Bean」、リグリー財団の寄付によるモニュメント（100 万ドル以上の寄付を行った個人や企業等の名前が刻まれている）、ハリス家の寄付による音楽及びダンス専用の劇場、自転車利用者用の施設であるマクドナルド・サイクルセンター、スペインの芸術家の Jaum Plensa による噴水クラウン・ファウンテインなどがあり、それぞれ寄付者が、著名な建築家や芸術家を選んで、より自己主張の強いパビリオンとなっている[1)]。

（公園の特徴）

シカゴ市は米国屈指の大都市であるが、その中でもミレニアムパークの場所は、シカゴ市内でもビジネス街の中心地であり、ここに世界第一級の公園を造るのだという機運が容易に醸成されうる場所であったことが、ミレニアムパーク成功の大きな要因であった。ミレニアムパークを企画したブライアン市長は、ただの公園ではなく特別なものにしようという思いから、シカゴに古くからあったパブリックアートの伝統を活かして、ミレニアムパークを、芸術をテーマに整備することが望ましいと考えた。このために、多額の寄付金を集めて、それによって最高レベルの建築家や芸術家によるパビリオンや作品で公園を満たすことを目指した。

地上部の公園部の整備は民間の寄付によってまかなうという方針だった理由は、単に公的負担を減らすということのみならず、標準設計に代表されるような陳腐な公共事業に陥らないように、民間資金によってより高質な施設水準を確保するという効果が期待されたことが大きい。このため、その寄付金集めは戦略的に実施された。例えば、歴史的にシカゴに深い関わり合いや縁のある有力な組織や個人を洗い出し、それらの対象に高額の寄付を募り、寄付者（団体含む）には施設のネーミングライト（施設名称決定権）が与えられた。自らや自らが属する組織の名前が冠された施設であるならば、いっそ思い切った整備を行おうという発想になり、結果的に、各寄付組織のメンツをかけた設計やデザインがなされるようになっていった[1)]。

※卵型モニュメントの写真は、兵庫県立淡路景観園芸学校の嶽山洋志主任景観園芸専門員・准教授の撮影による。

（都市の景観整備や観光ネットワーク形成と公園との関係）

ミレニアムパークができてから、シカゴ全体の観光入込客は増加し、観光客の多くはミレニアムパークを目指す傾向がある。ミレニアムパーク整備前は、シカゴ中心市街地の摩天楼が観光の目玉だったが、ミレニアムパークができてからは、摩天楼を目指していた観光客がミレニアムパークに流れた形になった。摩天楼はすでにデザインシーンが古くなっていたということもあり、高いデザイン性を持つ公園ができたおかげで、隣接する美術館を含む文化的な観光形態の傾向が強くなっていった*。

観光ネットワーク形成におけるミレニアムパークの役割としては、ミレニアムパークは、明らかにシカゴ市の新たな顔としてシカゴ市を代表する観光地として登場した。それは、単に観光客数を増やしたり、その観光周遊の流れをミレニアムパークに誘導するということにとどまらず、高いデザイン力を持った建築物やアートが、利用者を文化に目覚めさせ、それが美術館などの文化的施設の利用増進につながっているという影響も見逃せない。

（本公園の魅力に係る主な要素）

１．　都市の中心におけるシンボリックな空間で、パブリックアートの伝統を活かした都市のアート空間
２．一流の建築家や芸術家による高度なデザイン空間の実現
３．スケートリンクやサイクルセンター等の多様な施設
４．多額の民間寄付金収集による公園の整備方針
５．利便性が非常に高く、公園の直下に駅やバスターミナル、駐車場が完備
６．シカゴ市の観光利用が増加し、その観光客がミレニアムパークに集中
７．ジェイ・ブリッカー・パビリオンで多数のイベントの開催

〔参考文献・URL 等の情報根拠〕

1)都心部における新たな公共空間の創出と企業の社会貢献（田島夏与）2012 年、立教経済学研究第 65 巻第 3 号，143-161

＊公園管理者（シカゴ市）へのメール及び電話による問い合わせ（2019.2）

タイプⅣ　遊歩道公園

ハイライン

（所在地） アメリカ、ニューヨーク市
（規模） 延長 1.5 マイル（2.4 km）、幅 30～50 フィート（9.1～15.2m）
高さは 18～30 フィート（5.5～9.1m）＊
（開園年） 2009 年
（所有者） ニューヨーク市
（管理団体） フレンズ・オブ・ハイライン
（ハイライン整備の経緯）

マンハッタンのウェストサイドの工業地区を走る高架上軌道鉄道がハイラインだった。しかし、その後のモータリゼーションの進展によって、ハイラインは 1980 年に操業を停止し、残った鉄道敷の高架は撤去が決まっていた。そのような状況の中で、ハイラインとの直接的な利害関係の無かった二人の若者が、ハイラインの価値を認め、その保存活動を行ったのが新生ハイラインの始まりだった。彼らは、ハイラインを活用することによって、公園の少ないこの地に新しい公園ができ、それがこの街区の歴史を物語る文化遺産になりうると考えた。彼らはハイライン保全活動のために非営利法人であるフレンズ・オブ・ハイラインを設立（1999 年）し、保全活動のための募金活動等を進めていった。当初はハイラインの再利用に反対していたニューヨーク市も、やがて再利用を支持するようになった。その後、ニューヨーク市で所要の予算措置等がなされ、2009 年にハイラインの第一期区間が供用された。このように、ハイラインはごく普通の青年二人が、10 年の月日を費やして実現させたという稀有な事業であった[1)]。

（ハイライン周辺の市街地の保全）

ハイラインの公園化に最後まで反対していたのは、ハイラインの高架下の土地所有者たちであった。彼らは、ハイラインの高架が撤去されれば、そこに建物を建てることができ、莫大な利益が得られることを目論んでいた。このため、これらの土地所有者の権利を守るために、開発権の移転が行われた。それは、図 1-4 のように、ハイラインの上空の使えない開発権を別の街区の建物に移して売却するというものである。

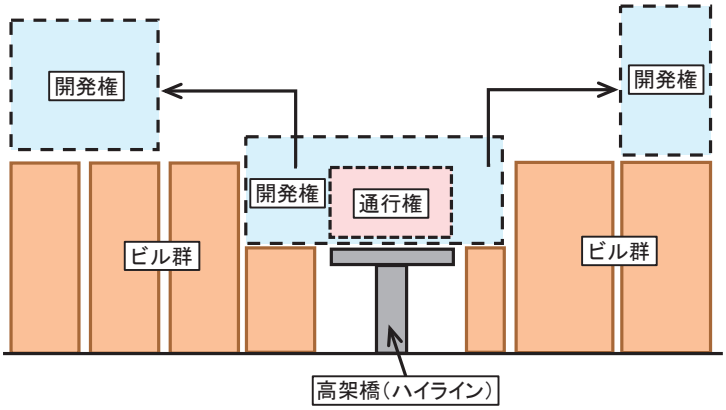


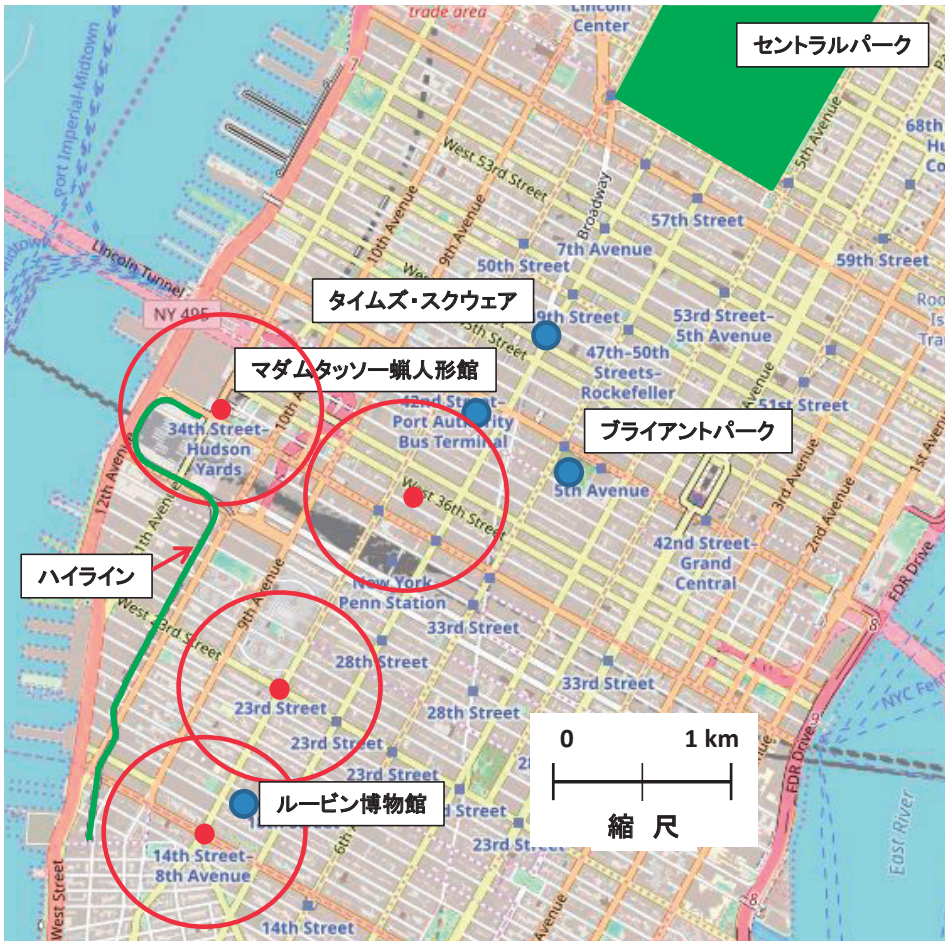
図 1-4　権利関係模式図

＊電話によるニューヨーク市公園レクリエーション部局への問い合わせ（2019.2）

この制度は、歴史的建造物であるニューヨーク市のグランドセントラル駅の保存方法が検討された際にあみだされた制度である。歴史的建造物が撤去されることによって生み出されるはずの開発権を、他の場所に売却したのである。こうしてハイラインの通るチェルシー歴史地区は、引き続き建物の高さを低く抑えることが可能となり、地区の景観保全につながった[2-4]。

（立地条件）

図 1-5 はニューヨーク市のマンハッタン島におけるハイラインの位置を示している。赤丸は、最寄駅とハイラインの最寄駅からの徒歩圏域（500m）を示している。もともとチェルシー地区は工業地帯だったために、周囲に有名な観光施設は存在しない。また、住宅地でもなかったことから、公園も少ない立地である。緑が少ない場所ゆえに、ハイラインの利活用方法案として、ハイライン上を公園化するという案が浮上したところである。



※周辺図のベース図は、著作権フリーのオープンストリートマップ

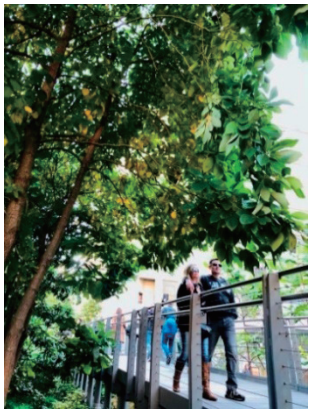
https://openstreetmap.jp/map#zoom=14&lat=40.75269&lon=-73.98786&layers=FB00F

図 1-5　ハイライン周辺図

（公園の施設内容とその特徴）

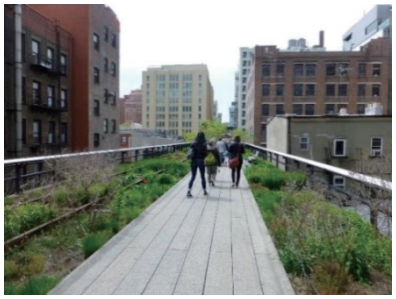
公園自体は、物理的には鉄道敷跡地を歩道として活用するものなので、計画上は物理的な自由度は低い。そんな中でも、ニューヨーク市からの委託によってフレンズ・オブ・ハイラインが2002年から公園計画のコンペを行った。その結果、36か国から720にも及ぶ作品が寄せられた。全体的に現状のハイラインの形状を活かそうという発想が共通していたが、中には、プールやジェットコースターの提案や、植栽が全く存在しない案もあった。それらの中から、今の美しいハイラインを、なるべくこのままの姿で残すべきという関係者や審査員の認識により、それは、ハイラインをマンハッタンというアルプスのふもとに横たわる緑の谷に見立てたもので、適度な植栽を有する高質なデザイン案が採用された。

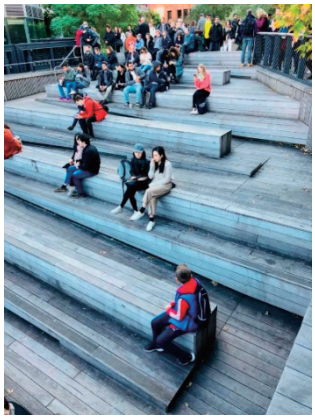
実施設計段階においても、細部のデザインへのこだわりが魅力向上には重要だった。通常は、公共事業であれば標準設計があり、また、安全上の理由から各種の施設には守るべき基準が設けられている。例えば、フェンスは必要な高さが2.4mであったが、これではせっかくの視界を遮ってしまう。このため、植栽エリアを設けて人が入り込めないようにすることでフェンスの高さの特例が認められた。他にも、公園の予算軽減の観点から、標準仕様に基づくベンチなどが求められたが、個別に丁寧にその必要性を説明してクオリティの高いベンチが設置されていった[1)]。



効果的に配された緑

フェンスとの間に人が入れないように　→
植栽帯が設けられている





←休憩にも、イベント時の
観客席にも使えるベンチ

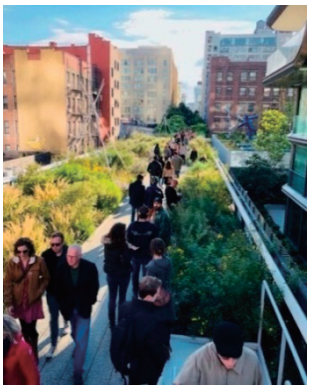
※本公園の掲載の写真は、兵庫県立淡路景観園芸学校の平田富士男主任景観園芸専門員・教授、同校の嶽山洋志主任景観園芸専門員・准教授の撮影による。

部分的に線路が残され、
鉄道跡であったことを→
示している

ライトアップされたハイラインが周囲の夜景と調和する

（運営管理の取り組み）

ハイラインでは、毎月いくつかのイベントが、異なったテーマで開催されている。また、ハイラインの運営維持管理費については、ニューヨーク市が、NPO であるザ・フレンズ・オブ・ハイラインに対して資金をサポートしている[5)]。



多くの利用者がハイライン上を歩く

ハイライン上でのパフォーマンス

（都市の観光動向と地区におけるハイラインの役割）

ハイラインが通るウェスト・チェルシー地区は、用途が軽工業地区だったところであり、もともと観光客が訪れるような場所ではなかった。しかもハイラインは鉄道廃線の高架であり、都市の再生にとっては阻害要因でしかなかった。それを、全く新しいタイプの公園として整備し、その結果年間 2 千万人*が訪れるようになったことを踏まえれば、観光への影響は計り知れないほ

＊電話によるニューヨーク市公園レクリエーション部局への問い合わせ（2019.2）

どだと評価できる。ハイラインは、同じマンハッタンにあるセントラルパークほどの集客力はないものの、面積がわずか1.8 ha程度の、セントラルパークのわずか0.5 %の広さしかない公園で、しかも歩いたり休憩したり、景色を眺めたりといった特化した利用しかできない公園で、年間2千万人という利用者数は特筆すべきことであろう。なお、ハイラインの整備とあいまって、地区の土地利用区分の変更が検討されたが、結果的に、ウェスト・チェルシー地区の土地利用区分の用途は、一部を除いて軽工業のまま変更されなかった。ハイライン関係者は、現在の古き良きチェルシーの街並みの面影を残すことを望んだのだった。ハイラインが供用されてから、チェルシー地区の観光客は増加し、特に、公園周辺にアートギャラリー、美術館、ミュージカルやオペラが披露できる施設などが建てられるようになり、アートと一体となった空間が形作られていった。今では、ハイラインは古いチェルシー地区のシンボルであり、かつグリーンインフラでもある[1)]。

(本公園の魅力に係る主な要素)

１．市民の愛着のこもった歴史的建造物の保全と活用
２．摩天楼の中の谷間をイメージした自然景観をなすデザインコンセプト
３．快適な歩行空間や眺望が得られるような施設計画・デザイン
４．観光地ではなかった地区を新たに観光名所にし、地区全体への観光客の集客
５．ハイラインと一体になった地区の景観向上と雰囲気の保全が図られ、地区の活性化に寄与

〔参考文献・URL等の情報根拠〕

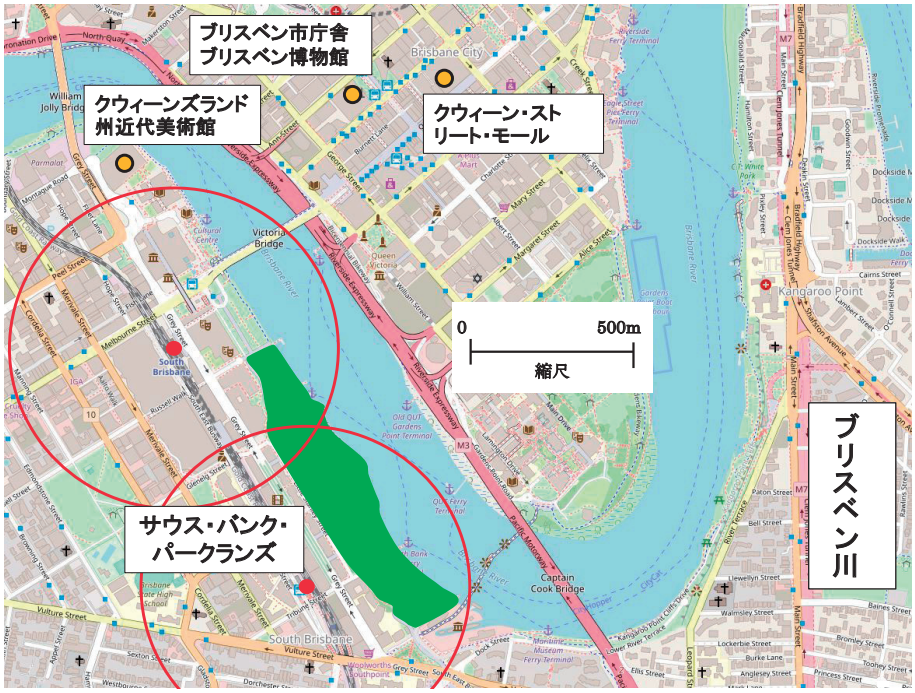
1)書籍名：High Line　～アート、市民、ボランティアが立ち上がるニューヨーク流都市再生の物語～　著者：ジョジョア・ディビッド、ロバート・ハモンド出版社：株式会社アメリカン・ブック＆シネマ
2) 鉄道跡地の遊歩道利用におけるレールバンク制度の運用と有効性～ハイラインにおける合意形成の制度的枠組み～:木村雄介他、土木学会論文集D1(景観・デザイン)Vol.69, No.1, 76-89, 2013
3)ニューヨーク・ハイラインにおける歴史的効果橋再利用案の形成過程：木村雄介他、（社）日本都市計画学会都市計画論文集N0.45-3, 2010年10月, 199-204
4)遊休地の公共空間等への活用に関するニューヨーク市における取組：別所 力、Green Age 2017-2, 12-15
5) HP: Friends of High LineのHP ＜https://www.thehighline.org/ 参照日2019.1.15＞

タイプV　施設複合型公園

サウス・バンク・パークランズ

（所在地） オーストラリア、ブリスベン市
（面積） 17 ha
（所有者） ブリスベン市
（管理団体） City Parklands Services Pty Ltd
（公園の整備経緯）

オーストラリア、クイーンズランド州の州都ブリスベン市は、蛇行するブリスベン川に沿って発展した都市であり、川の南側のサウス・バンク地区は、ビジネスの中心地として急速に発展していった。ところが、1893 年の洪水によって、土地の低かった南側が甚大な被害を受け、以後、中心地は川の北側へと移っていった。このため、その後は、サウス・バンク地区は荒廃していき、倉庫などが立ち並ぶさみしい場所となっていったが、その再活性化の景気となったのがブリスベン国際博覧会だった。会場をサウス・バンクに設けたのは、ここに人々の滞留を生み、それを起爆剤にするという目論見もあったようである*1。1988 年に開催されたブリスベン国際博覧会は、半年でおよそ 160 万人の利用者を動員するなどの大成功を収めた。この博覧会の会場跡地は、1992 年からサウス・バンク・パークランズという公園として供用されている[1)]。



※公園周辺図のベース図は、著作権フリーのオープンストリートマップ
https://openstreetmap.jp/map#zoom=15&lat=-27.47612&lon=153.02178&layers=FB00F

図 1-6　公園周辺図

＊1：ブリスベン国際博覧会日本館元副館長井上忠佳氏へのヒアリング(2019.1)

（立地条件）

公園の周辺図(図 1-6)にあるように、サウス・バンク・パークランズは、ブリスベン市街地の中のサウス・バンク（ブリスベン川の南側）と呼ばれる地区の中にあり、観光案内にはブリスベンに来たなら必ず訪れてほしいスポットに挙げられているほどである。サウス・バンク・パークランズへのアクセスは良く、電車の最寄駅からも近く、フェリーやバスも利用可能である。ブリスベンの中心市街地はコンパクトで、ブリスベン川の北岸の中心地から、サウス・バンク・パークランズまで歩くことも可能であり、ブリスベン市内の人気の観光地であるクイーンズランド州美術館やブリスベン博物館なども近い。

（公園施設の内容とその特徴）

サウス・バンク地区は、今やブリスベン市民の最高のライフスタイルを実現する場、また文化をリードする地区として人気を誇り、芸術や音楽などの学校も多い。本地区の中で中核をなしているのがサウス・バンク・パークランズである。この 17 ha の日比谷公園ほどの公園は、ブリスベン川の湖岸のという自然条件を活かした緑豊かなデザインが特徴であり、素晴らしい川の景色を堪能しながら、リラックスしてくつろぐのに最適な市民のオアシスとなっている。サウス・バンク河岸には、世界的に一流でスタイリッシュなレストランやバーがサウス・バンク・パークランズの景観と一体となって隣接し、広々とした河岸環境を作り出している。それらの施設をつなぐように、園内は川沿いにプロムナードやザ・アーバーと呼ばれる遊歩道が配され、散策やサイクリングに利用されている。また、園内には、リゾート地の雰囲気を醸し出す人工ビーチやプール、プレイグラウンドなどの遊びの場や、観覧車、海事博物館などもあるほか、カフェ・レストラン・バーベキューコーナーもあるため、多くの人に利用されている。また、毎年多くのイベントが開催され、特に週末にはマーケットも開催される。さらに、パークランズから外に出た大通り沿いにはレストランが軒を連ね、今やトレンディーなエリアとなっている[1)]。

（運営管理等の取り組み）

サウス・バンク・パークランズの管理運営上の取り組みとして、一年を通してイベント開催が多いことが特徴的だと言える。毎年開催されるイベントとしては、キーイベントとして、クリスマス・イン・ブリスベン、ニューイヤーイベント、オーストラリア・デイ、ブリスベン・フェスティバル、ナイト・ヌードル・マーケットやフレンチ祭などがあるが、これらのイベントは毎年内容が変わるし、他にも週末にクラフトマーケット、コンサート、エンターテイメントなどの催しもある[*2]。

（都市の観光動向と当該公園の役割）

サウス・バンク・パークランズは、さびれていたサウス・バンクの再生を目指して開催されたブリスベン国際博覧会の跡地を公園化したものであり、サウス・バンクの河畔を周遊できるように、川沿いの利用者動線と、利用者を惹きつけるための魅力的な核的施設（人工ビーチや観覧車

＊2：公園管理者(City Parklands Services Pty Ltd)へのメールと電話による問い合わせ(2019.2)

など）が設けられている。こうした取り組みが功を奏して、今ではブリスベン川の北岸と南岸の巡る周遊が図られている。加えて、多様で多くのイベントの開催が、様々な世代の多様な目的を持った利用を促進している。

ただし、サウス・バンク・パークランズは、単に人を呼ぶことだけを目的としたものではなく、文化的でかつ穏やかな都市のライフスタイルの現出の場として設計・デザインされている。人が羨望するライフスタイルを過ごせる場所こそがサウス・バンクであり、サウス・バンク・パークランズは、そのサウス・バンクを象徴する場であることがサウス・バンク・パークランズの魅力であり、その魅力ゆえにブリスベン川を挟んだ利用者の周遊を生み出していると言える。

（本公園の魅力に係る主な要素）

１．リバーサイド空間再生による市民の理想的空間の創出

２．リバーサイドでの文化的ライフスタイルを実現するデザインコンセプトに基づいた、人工ビーチ等のトロピカルな雰囲気のデザイン

３．観覧車、人工ビーチ、プレイグラウンドなどの公園施設

４．南岸の拠点をなし、ブリスベン川の両岸を周遊する観光ルートの創出

５．新たな文化的な都市生活の拠点の整備によって、洪水によって廃れた地区の活性化に寄与

〔参考文献・URL 等の情報根拠〕

1)HP：visit brisbane 〈https://www.visitbrisbane.com.au/south-bank 参照日 2019.1.15〉

タイプⅥ　歴史的公園

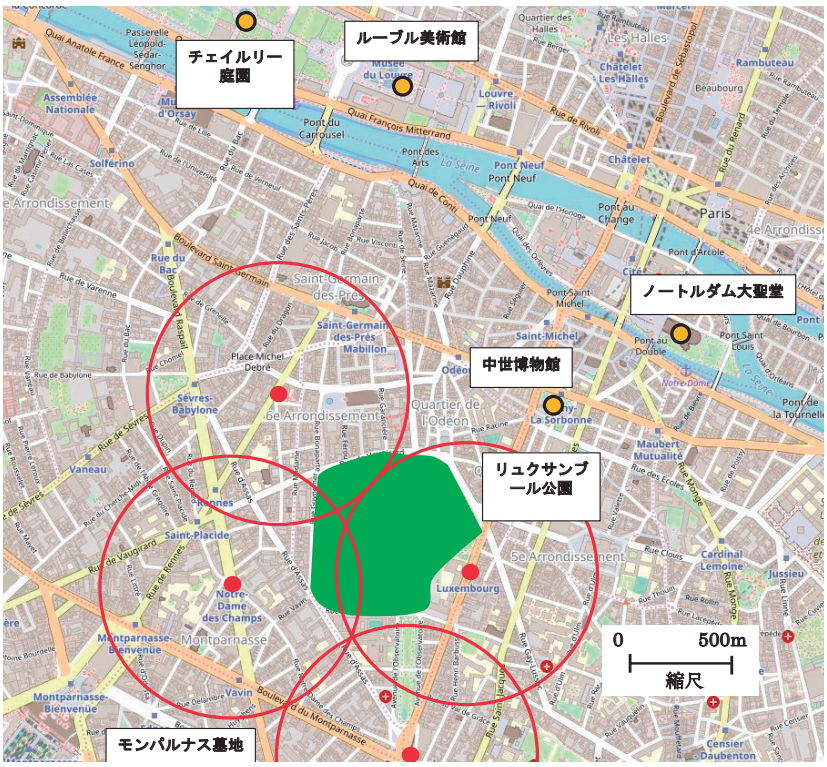
リュクサンブール公園

（所在地） フランス、パリ 6 区
（面積） 25 ha
（所有者） フランス元老院
（管理団体） フランス元老院 [1)]
（公園の設置経緯）

リュクサンブール公園は、ルイ 13 世の生母が、王宮庭園の管理を担当した宮廷庭師であるジャック・ボワソーに 1612 年に命じて、リュクサンブール宮殿に付随する庭園として整備された。フランス革命時には牢獄として使用されていたこともあったが、ナポレオン・ボナパルトが第一統領となった統領政府期（1799～1804 年）以降に、リュクサンブール庭園は元老院の敷地となった。今でも、元老院の議事堂が、庭園北端のリュクサンブール宮殿の中に入っている。このため、同宮殿の内部は非公開となっているが、リュクサンブール公園は元老院の庭園として一般に公開されている*。

（立地条件）

リュクサンブール公園は、パリ市内の中心地に位置し、観光地で有名なノートルダム大聖堂とモンパルナス地区のちょうど中間に位置する（図 1-7）。公園周辺の公共交通機関（メトロ、高速地下鉄 RER 、バス） がす



※ベース図は、著作権フリーのオープンストリートマップ
https://openstreetmap.jp/map#zoom=15&lat=48.85013&lon=2.33987&layers=FB00F

図 1-7　公園周辺図

でに充実しており、周辺駅から歩いてすぐの立地である。また、徒歩であっても、セーヌ川沿いのノートルダム大聖堂やルーブル美術館などまで移動することも可能である。

（公園施設内容とその特徴）

宮廷を豪華に彩どる園内の花壇植栽は年 3 回植え替えられ、全ての苗が専用の苗畑で生産されている。また、宮殿施設ゆかりの施設（養蜂園、ポニー乗馬場、オランジェリー〔冬季の園芸種の保存施設〕、温室など）が配されているほか、テニスコートやバスケットコート、ペタンクなどの運動施設や、子供用の遊び場、小さなカフェや売店もある。公園の立地条件が良く、大学も近くに立地することから、家族連れから就業者、学生、観光客に至る幅広い利用者に活用されている。宮殿らしい穏やかで、豪華な雰囲気の中で、散歩・休憩・読書などの思い思いの利用がなされている。また、中でも、当公園で特筆すべきことは、画家のドラクロワ、ジョルジュ・サンド、ショパンなどの著名な作家の作品ばかりの約 100 体の優雅な彫像の存在である。

園内の随所に置かれた彫刻

柵が設けられた子供の遊び場

木陰のポニー乗馬場

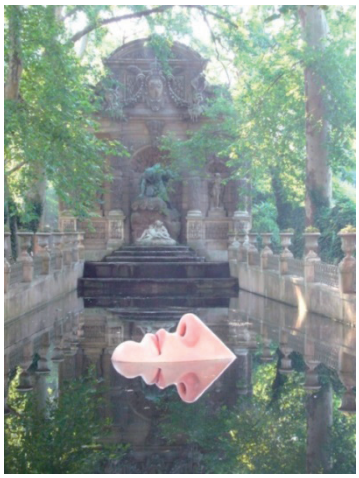
ビスタ上に設けられた規模の大きな修景用人工池。夏期は子供用のヨットが浮かべられることもあるという →

※本公園の写真はフランス高等研究実習院博士研究員水真洋子氏撮影による。

リュクサンブール公園は、①元老院の庭としての役割、②フランス史、庭園史、園芸史に中心的役割を果たした場所としての役割 、③歴史的にパリ市民の憩いの場として利用されていたという歴史がある場所であり、その歴史的背景の結果として今日の観光地としての公園が出来上がったものであり、公園の魅力は歴史とともに醸成されてきたことがうかがえる*。

（イベント）

イベントは、大きく、主催者イベントと、外部からの持ち込みイベントに分かれる。主催者イベントは、毎年「秋の展覧会」「ガーデン・農業祭」、「ヨーロッパ遺産の日」が開催される他、夏の間はオランジェリーで「アート展」が開催されている。オランジェリーは冬季に果樹等の植物を保管する場所なので、夏は空室になっているからである。



「ガーデン・農業祭」は庭園をテーマとした文化通信省主催の催し物で、「ヨーロッパ遺産の日」は、建築物を中心とした欧州評議会と欧州議員会の主催行事である。毎年夏に行われるオランジェリーにおけるアート展は、公園の利用者増加目的で実施しているというよりは、むしろアーティストに展覧会の機会を与えるという目的で開催されている。「秋の展覧会」は、元老院主催のイベントで、庭師が所属する部署が担当の催し物であり、庭師が中心にイベントをオーガナイズしている。

こうした主催者イベント以外のアート関連の催し物については、アーティスト側から依頼を受けて開催する右の写真のような持ち込みイベントがある*。

（都市の観光動向と公園の役割）

リュクサンブール公園の誘客の面ではその立地の良さが際立っている。リュクサンブール公園は、セーヌ川沿いに並ぶ人気のある観光地から近く、同じく人気のあるモンパルナスとセーヌ川のちょうど中間に位置する。地下鉄などの公共交通機関の駅から近いが、徒歩であってもモンパルナスやセーヌ川まで散策することができ、リュクサンブール公園周辺は良好な住宅街でホテルも多い。十分な周遊の拠点になりうる立地条件を有している。

そして、何より本公園の魅力は、17 世紀に建造されたブルボン王朝ゆかりの宮殿や庭園をそのまま保存し活用していることである。宮殿を望める庭園内に一歩足を踏み入れただけで、往時の世界に浸ることができる。園内に配置された多数の彫刻がその雰囲気に趣きを添え、また、個別の公園施設を見ても、宮殿であった頃を彷彿させる施設が散見される。例えば、養蜂園・ポニー乗馬場・オランジェリーなどである。こうした往時が偲ばれる園内のしつらえが、公園内での休憩や散策といった利用に満足度を与えているものと考えられる。

本公園の元になっている庭園は 17 世紀に造られたところであり、宮殿のまわりの市街地は、むしろ宮殿整備後に発展していき、宮殿周辺の市街地は、宮殿と一体となって景観を形成してい

＊リュクサンブール公園専属庭師へのヒアリング(2019. 1)

ったものである。まさにこの場所の本来の歴史的意味とその価値の保持こそが、本公園の魅力と考えられ、その保全の姿勢こそが多くの観光客を惹きつけているものと考えられる。

(本公園の魅力に係る主な要素)

１．ブルボン王朝時代の宮廷文化の保全と活用
２．ブルボン王朝の宮廷空間を保全し、王朝時代の施設や彫刻を保存
３．豪華な花壇植栽
４．ポニー馬場、ペタンク場、養蜂園などの王朝ゆかりの多様な施設の存在
５．パリの街自体が、宮殿等の歴史的建造物を保全して成り立っており、その中心的施設

〔参考文献・URL 等の情報根拠〕

1) 元老院 HP：〈https://www.senat.fr/role/fiche/comptes_budget.html　参照日 2019.1.15〉

タイプⅦ　テーマ特化型公園

シンガポール植物園

（所在地） シンガポール、タングリン市

（面積） 82ha*

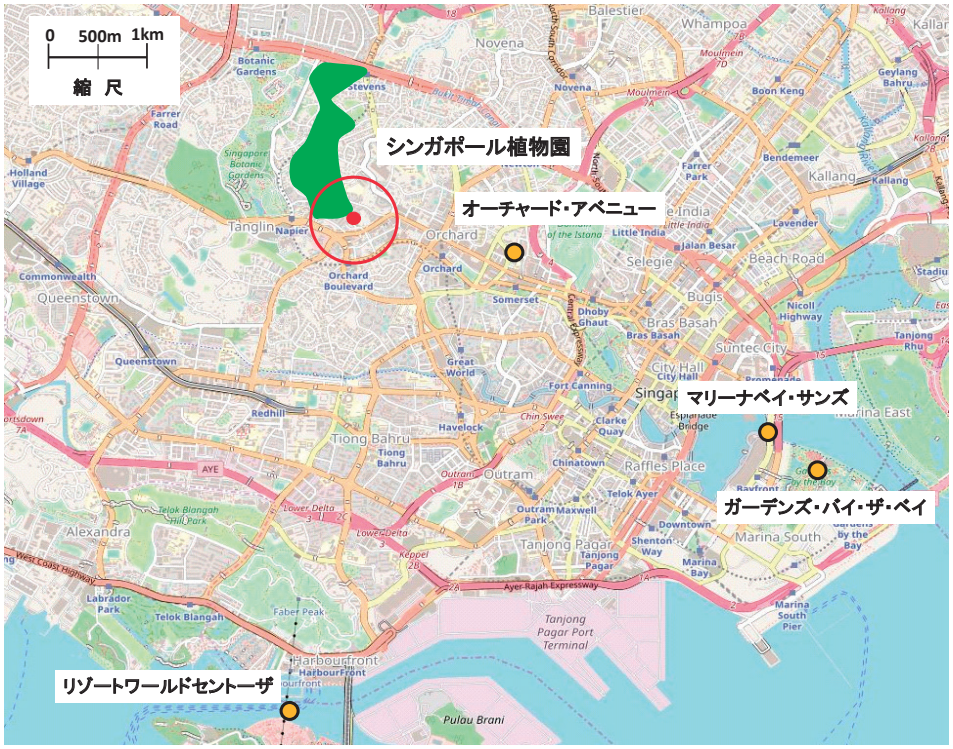
（所有者） シンガポール政府

（管理団体） 国立公園庁

（植物園設置経緯）

シンガポール植物園は 1859 年に設立され、160 年にわたる歴史を有し、2015 年にはシンガポール初の世界遺産にも登録された。

植物園として、作物としてのゴムの研究や輸出作物としてのランの研究を通じて、国の農産業の振興に貢献してきた。また、近年では国策としての都市緑化につながる緑化技術の面でも貢献している。



※公園位置図のベース図は、著作権フリーのオープンストリートマップ

https://openstreetmap.jp/map#zoom=14&lat=1.28795&lon=103.82361&layers=FB00F

図 1-8　シンガポール植物園の位置図

＊シンガポール植物園へのメール及び電話による問い合わせ(2019.2)

（立地条件）

位置図では、シンガポールで人気の高い主要な観光スポットを黄色で示している。図 1-8 のように、シンガポール植物園は、シンガポールの中心地の一角に位置し、MRT の駅から近いという良好な立地条件を有している。車やバス、タクシー利用によるアクセスも容易である。徒歩でも、ショッピングで有名なオーチャード・アベニューにたどり着けるし、また、MRT を使って北上すれば、北部の観光地であるナイトサファリなどを周遊することも可能である。

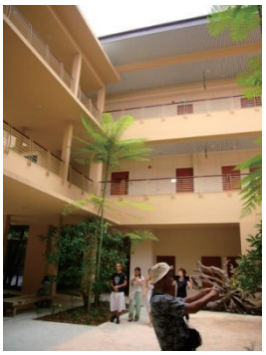
（施設内容とその特徴）

160 年に及ぶ植物園の歴史の中で暫時施設が拡充されてきており、園内には多種多様な施設が配されている。また、各々の施設は植物をテーマにしつつも、いかに楽しみながら、植物にまつわることが学べるかという姿勢が見られるとともに、子供から大人まで楽しめる内容になっている。

数多くある施設の中でも、特徴的な施設としては各種のテーマパークの存在が挙げられる。それらは、地球の始まりから植物の進化をたどる庭であるエボリューションガーデン、ヒーリングガーデン、フレグラントガーデン、様々な形や色の葉をテーマにした庭であるフォリッジガーデン、盆栽ガーデン、多肉植物や乾燥地帯の植物などの庭であるサンガーデン、エコガーデン（ハーブ、タケ、果樹などの経済上重要だった植物の庭）、ジンジャー・ガーデンなどがある。

また、特にナショナルオーキッドガーデンは、1,000 種以上のランの原種と 2,000 種以上の交配種を有する面積約 3ha の世界最大級のラン園である。本植物園では、輸出用のランの栽培のために、1928 年からランの交配や繁殖の研究が進められてきたが、そうした積み重ねをベースにして開園したものである。オーキッドガーデンの中には、熱帯の高地の環境で生育するランを展示しているクールハウスや、熱帯の密林に生育するランの品種を展示しているミストハウスが設けられている [1)]。

本植物園は、常に新しい施設の導入を試み、植物園の区域も拡大されてきた。慈善家の寄付によって 2007 年にオープンしたジェイコブ・バラス・チルドレンズ・ガーデンは新しい施設であり、アジア発の子供のための庭とうたわれている。14 歳までの子供が対象で、大人のみでは入れない。テーマは、「地球上のすべての生命は植物によって成り立っている」ことをテーマに、子供たちが冒険と遊びを通して、自然や植物について学び、親しめることを意図した施設である [2)]。



ボタニー・センターには、植物標本室、植物園芸図書館、工作教室などがあり植物園の学術的な根幹施設である。もともとはゴムやランなどの熱帯系有用植物の研究に端を発した研究施設ではあるが、ガーデンシティを目指したシンガポールの都市緑化技術を支えた施設でもある[3)]。

160 年の歴史のある本植物園には、歴史的に価値のあるヘリテッジツリー（33 種 41 本）や、歴史のある建造物などの歴史的なランドマークが多い。これらは、ヘリテッジとして説明版が置かれ、これらを巡るヘリテッジツアーも行われている。また、ヘリテッジミュージアムも 2013 年にオープンしている。右写真は、ヘリテッジツリーの一つである[1)]。

（運営管理の取り組み）

誘客対策としては、公園利用者へのサービス向上策として、ボランティアによる植物園ガイドや、各種イベントに力が注がれている。イベントは、森林や熱帯雨林、ラン、バックヤードなどを案内するツアーが主流であり、楽しんで植物が理解できるように植物をスケッチするイベントもある*。

以上のように、シンガポール植物園は、長い歴史を通じて、植物をテーマにして、いかに分かりやすく植物と人との関わりを伝えようとしてきたかが分かる。また、そして、こうした取り組みが積み重なって、その歴史自体をヘリテッジという形で利用者に提示している。このような植物をベースに置いた一種のテーマパークとしての有り様が、本植物園の魅力と考えられる。

（都市の観光動向と本植物園の役割）

シンガポール植物園は、熱帯の植物や園芸の研究や教育、植物種の保全を目的とした施設であり、1 万種以上の植物を有し、ヤシやラン、ソテツ、ショウガなどの特筆すべきコレクションを有している。19 世紀の庭園の景観をよく保全し、その景観には、シンガポール初期の形態をしのぶことができるという。1859 年に設立された植物園の継続的な保全と開発は、ガーデンシティというビジョンを有する都市国家シンガポールの生命都市としての理念を維持するための鍵と言えるものだった。シンガポール人が、この植物園に郷愁に似た愛着を感じるのはまさにそんな理由によるのであろう。そして、そうしたシンガポール国民の植物園の思いが、シンガポールで最初の世界遺産登録に繋がったとされる。

このように、本植物園は、多くの観光客を惹きつけるという意味では観光に貢献しているが、それ以外にも、シンガポールという都市国家における本植物園の意義は、シンガポール全体の都市緑化への貢献を見逃すことはできないであろう。それは、シンガポール人の植物園への愛着に通じるものではあるが、植物園が都市緑化の技術的・学術的な根拠を与える施設という立場から、都市の緑化環境向上に寄与し、ひいてはそれが都市全体の魅力向上につながり、それが観光客や定住者を都市に惹きつける原動力になっているという側面である。

シンガポールは金融やIT産業などを主産業としているため、高度な人材を必要とする。国際的な都市間競争において、都市環境の向上は不可欠であり、特に、IT産業のようなバーチャルな世界における知的労働者には、究極のリアリティである自然環境が必要だという指摘もある。このため、シンガポール政府は、そうした都市環境創造への意志や方向性を明確に示すため、従来の「ガーデンシティ」というコンセプトから、自給自活を最終ゴールとした「シティ・イン・ザ・ガーデン」へとその目標像を大胆に転換し、都市の緑化を進めてきた。その技術的根拠を与えるのが植物園であると言える[3)]。

緑の多いオーチャード・アベニューの風景

(本公園の魅力に係る主な要素)

１．園芸産業振興、都市緑化の推進、人と植物の関係性の啓発
２．植物の美しさを際立たせる展示とデザイン
３．各々の植物の特徴を活かした各種テーマパークの整備と、人と植物の関わりの観点に基づいた解説
４．主に植物と人をつなぐイベントの開催
５．国民の愛着と誇りのこもった施設

〔参考文献・URL等の情報根拠〕

1) シンガポール植物園のHP<https://www.nparks.gov.sg/sbg　参照日 2019.1.25>
2) マレーシア都市緑地会議・IFPRAアジア太平洋支部大会およびシンガポール公園緑地視察報告書（IFPRAジャパン、平成26年11月）
3) チェンマイ国際園芸、ロイヤルフローラ・ラチャプルック2006出典参加報告書、財団法人国際花と緑の博覧会記念協会

メルボルンの王立植物園

（所在地） オーストラリア、メルボルン市

（面積） 38 ha

（所有者） ビクトリア州

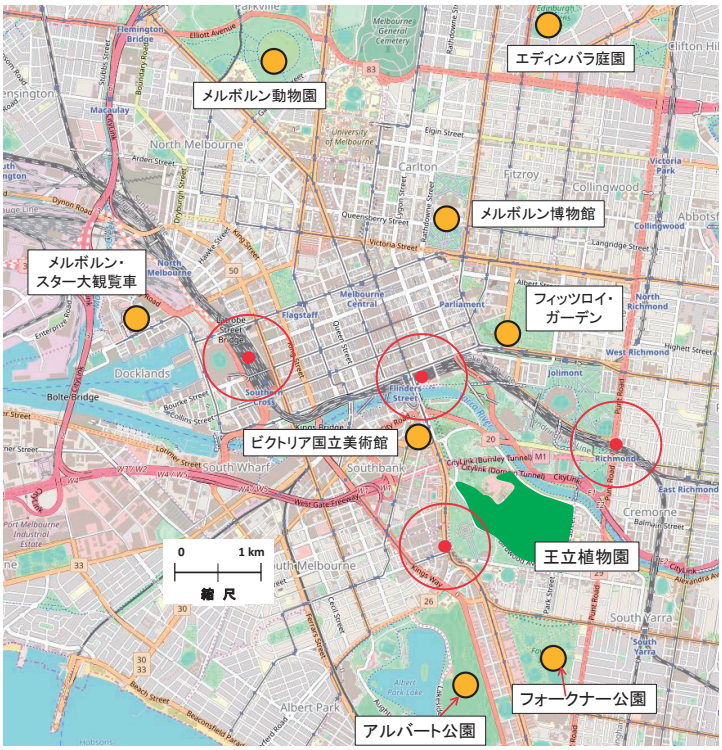
（管理団体） ロイヤル植物園財団ビクトリア

（植物園の設置経緯）

メルボルン市内の王立植物園は、ヤラ川の南側のほとりに 1846 年に設立された。その後、1958 年には、エリザベス二世から植物園の名称に「Royal」を冠することが認められた。今では、世界中から 8,500 種に及ぶ植物が集められて園内に展示されている[1)]。

（立地条件）

王立植物園は、メルボルンの市街地のほぼ中心に位置し、公共交通機関の駅（トラム）からも近く観光客には便がいい。特に、メルボルンの中心地は、王立植物園をはじめとして公園や庭園が多く、緑豊かな都市環境の中でも中心的な緑地であると言える(図 1-9)。王立植物園は、ビクトリア国立美術館や、ヤラ川をはさんで立地するメルボルンオリンピック公園等の公共施設と連なっており、メルボルンの緑地の骨格の一部を成すとともに、市内観光の拠点として機能している。



※公園位置図のベース図は、著作権フリーのオープンストリートマップ

https://openstreetmap.jp/map#zoom=14&lat=-37.82206&lon=144.96621&layers=FB00F

図 1-9　公園位置図

（植物園の施設内容とその特徴）

本植物園には、オセアニアを始めとした全世界から収集された貴重な植物が、その生育環境が理解できるように展示してあるとともに、植物研究のための施設や、ボランティア等の支援組織の活動を促すための施設などが揃っている。生育環境の分かる展示施設とは、例えば、砂漠をはじめとした乾燥地に生育する植物を展示している乾燥ガーデン、ニュージーランドの自生種コレクション、シダの生い茂る小峡谷の空間を作り出すシダ小峡谷、熱帯の植物が展示してあるトロピカル温室などである。

他にも 150 万点もの植物標本を有する植物研究施設であるナショナル・ハーバリウムや、メンバー制による植物園を支える非営利の組織の拠点施設（メルボルン・フレンズ・オフィス）がある[1)]。

（植物園の管理と誘客の取り組み）

本植物園の特徴としては、植物園を楽しみ、植物が理解できるような様々なソフト、特にガイドツアーが用意されているところが挙げられる。

最も簡単に園内を巡るには、園内探検ツアーと呼ばれる熟練のガイドも同乗した園内バスツアーが最適である。熟練ガイドが、園内の自然や歴史について説明しながら園内を巡り歩く無料ツアーもある。アボリジニのガイドと一緒に園内を歩いて、この地の歴史やアボリジニの生活と植物との関わりなどについて学ぶことができるアボリジニ遺産ツアーや、ガーデニング同好会や写真クラブ、プロバスクラブなどの各種の愛好会用に、リクエストに応じた園内ツアーも企画し提供している。このような園内のみでなく、利用者の要望に応じて、自然の知識に詳しいガイドを公園外にまで派遣するボランティア出前ツアーまで用意されている。

エンターテインメント的な施設としては、オーナメンタル・レイクにて、伝統的な小船を使ったミニクルーズの舟遊ツアーや、夏期期間中の夜間に中央芝生広場で実施される屋外映画鑑賞イベント（ムーンライトシネマ）が開催されている。また、園内には自撮が行えるスポットが随所に設けられ、思い思いに自らのショットの撮影に興じられている[1)]。

（本公園の魅力に係る主な要素）

１．歴史ある植物園の伝統を踏まえた植物の展示・解説
２．世界中から集められた植物の原生植生空間の再現
３．砂漠から熱帯までの多様な環境を再現・展示
４．公園や庭園が都市の中心に多数立地する中で、最も中心に位置し、周遊の要
５．多様なガイドシステムによる案内
６．自撮スポットの設定といった独自の工夫

（参考文献等）

1) Royal Botanic Gardens Victoria の HP <https://www.rbg.vic.gov.au/ 参照日 2019.1.20>

海外事例に基づく魅力向上要件の設定

ここまで海外の代表事例 8 公園について、それぞれの魅力の要素について、各事例概要の中の「本公園の魅力に係る主な要素」の欄にて魅力要素を抽出した。それらを表 1-2 に列挙した。また、同じ性格の要素をグルーピングするために、本表では「分類」欄と「小分類」欄を設けて、該当する分類を記載した。

表 1-2　海外事例の魅力

公園	主な魅力内容	分類	小分類
スタンレーパーク	都市に残された最後の原生自然	計画・設計	テーマ・理念、公園施設内容（多様性）
	原生自然を保全・活用した計画方針に基づいた自然に影響の少ない遊歩道（シーウォール）の整備	計画・設計	公園デザインコンセプト
	ミニゴルフやテニスなどの運動施設や水族館	計画・設計	公園施設内容（多様性）
	ガイド付き馬車ツアーによる園内案内	ソフトサービス	利用者案内
	自然を活かしたイベント（マラソン、ウォーキング等）の実施	ソフトサービス	イベント
セントラルパーク	大都市の中心にある広大な自然地で、都市のスプロール化防止を図る広大な緑地空間	計画・設計	テーマ・理念、公園デザインコンセプト
	池、広場等の新たに人工的に自然景観を作り上げたデザイン	計画・設計	公園施設デザイン
	歴史のある各種施設（回転木馬、水族館など）の存在	計画・設計	公園施設内容（多様性）
	近隣の博物館との情報共有	周辺とのネットワーク形成	観光ネットワーク形成[他施設との連携]
	黎明期の都市の発展の過程で、早期に中心に自然空間ができたことにより、公園周辺の良好な市街地の形成	周辺とのネットワーク形成	周辺市街地との連携
ミレニアムパーク	都市の中心におけるシンボリックな空間で、パブリックアートの伝統を活かした都市のアート空間	計画・設計	テーマ・理念、公園デザインコンセプト
	一流の建築家や芸術家による高度なデザイン空間の実現	計画・設計	公園施設デザイン
	スケートリンクやサイクルセンター等の多様な施設	計画・設計	公園施設内容（多様性）
	多額の民間寄付金収集による公園の整備方針	公園の実現手法	
	利便性が非常に高く、公園の直下に駅やバスターミナル、駐車場が完備	周辺とのネットワーク形成	公共交通の利便性
	シカゴ市の観光利用が増加し、その観光客がミレニアムパークに集中している。	周辺とのネットワーク形成	観光ネットワーク形成[周遊上の位置づけ]
	ジェイ・ブリッカー・パビリオンで多数のイベントの開催	ソフトサービス	イベント

公園	主な魅力内容	分類	小分類
ハイライン	市民の愛着のこもった歴史的建造物の保全と活用	計画・設計	テーマ・理念
	摩天楼の中の谷間をイメージした自然景観をなすデザインコンセプト	計画・設計	公園デザインコンセプト
	快適な歩行空間や眺望が得られるような施設計画・デザイン	計画・設計	公園施設デザイン
	観光地ではなかった地区を新たに観光名所にし、地区全体への観光客の集客	周辺とのネットワーク形成	観光ネットワーク形成［周遊上の位置づけ］
	ハイラインと一体になった地区の景観向上と雰囲気の保全が図られ、地区の活性化に寄与	周辺とのネットワーク形成	周辺市街地との連携
サウス・バンク パークランズ	リバーサイド空間再生による市民の理想的空間の創出	計画・設計	テーマ・理念
	リバーサイドでの文化的ライフスタイルを実現するデザインコンセプトに基づいた、人工ビーチ等のトロピカルな雰囲気のデザイン	計画・設計	公園デザインコンセプト、公園施設デザイン
	観覧車、人工ビーチ、プレイグラウンドなどの公園施設	計画・設計	公園施設内容（多様性）
	南岸の拠点をなし、ブリスベン川の両岸を周遊する観光ルートの創出	周辺とのネットワーク形成	観光ネットワーク形成［周遊上の位置づけ］
	新たな文化的な都市生活の拠点の整備によって、洪水によって廃れた地区の活性化に寄与	周辺とのネットワーク形成	周辺市街地との連携
リュクサンブール公園	ブルボン王朝時代の宮廷文化の保全と活用	計画・設計	テーマ・理念
	ブルボン王朝の宮廷空間を保全し、王朝時代の施設や彫刻を保存	計画・設計	公園デザインコンセプト、公園施設デザイン
	豪華な花壇植栽	計画・設計	公園施設内容（多様性）
	ポニー馬場、ペタンク場、養蜂園などの王朝ゆかりの多様な施設やの存在	計画・設計	公園施設内容（多様性）
	パリの街自体が、宮殿等の歴史的建造物を保全して成り立っており、その中心的施設である。	周辺とのネットワーク形成	周辺市街地との連携
シンガポール植物園	園芸産業振興、都市緑化の推進、人と植物の関係性の啓蒙	計画・設計	テーマ・理念
	植物の美しさを際立たせる展示とデザイン	計画・設計	公園デザインコンセプト
	各々の植物の特徴を活かした各種テーマパークの整備と、人と植物の関わりの観点に基づいた解説	ソフトサービス	利用者案内
	主に植物と人をつなぐイベントの開催	ソフトサービス	イベント
	国民の愛着と誇りのこもった施設	公園利用によって醸成された魅力	
メルボルンの王立植物園	歴史ある植物園の伝統を踏まえた植物の展示・解説	計画・設計	テーマ・理念
	世界中から集められた植物の原生植生空間の再現	計画・設計	公園デザインコンセプト
	砂漠から熱帯までの多様な植生環境を再現・展示	計画・設計	公園施設デザイン
	公園や庭園が都市の中心に多数立地する中で、最も中心に位置し、周遊の要	周辺とのネットワーク形成	観光ネットワーク形成［周遊上の位置づけ］
	多様なガイドシステムによる案内	ソフトサービス	利用者案内
	自撮スポットの設定といった独自の工夫	計画・設計	公園施設デザイン

表 1-2 のうち、「分類」欄と「小分類」欄に記載された各分類項目については、以下のように整理できる。なお、この項目分類のうちの「１．（２）公園デザインコンセプト」とは、公園全体のデザインコンセプトを、「１．（３）公園施設デザイン」は、個別の公園施設のデザインを意味している。また、表 1-2 の中の事例のうち、「１．計画・設計」中の「（１）テーマ・理念」、「（２）公園デザインコンセプト」、「（３）公園施設デザイン」がそれぞれ明確に分かれている事例もあるが、それらの区分があいまいな内容で記されている事例も見受けられる。しかしながら、これらの項目は、内容的には各計画ステージにおいて本来整理されているべきものであり、このような区分の整理はどの公園でも可能なものと考えられる。

なお、「５．その他」については、どの項目にも該当しなかったものを分類したものであるが、本欄には、シンガポール植物園が、市民の各ライフステージにおいて利用されることによって醸成された愛着や、植物園の社会的貢献に対する誇りが位置付けられている。

１．計画・設計
　　（１）テーマ・理念
　　（２）公園デザインコンセプト
　　（３）公園施設デザイン
　　（４）公園施設内容（多様性）
２．公園の実現手法
３．周辺とのネットワーク形成
　　（１）公共交通の利便性
　　（２）観光ネットワーク形成
　　１）周遊上の位置づけ
　　２）他施設との連携
　　（３）周辺市街地との連携
４．ソフトサービス
　　（１）利用者案内
　　（２）イベント
５．その他（公園利用によって醸成された魅力）

次に、先に掲げた８公園全てについて、改めて上記分類項目に沿って整理し、それらを表 1-3 にとりまとめた。それは、表 1-2 の魅力内容を上記分類に沿って体系的に整理するとともに、これらの項目が全ての公園に普遍的に該当するものなのかどうかを確認するためである。

表 1-3　海外代表公園事例の魅力要素の整理

要素区分＼公園		スタンレーパーク	セントラルパーク	ミレニアムパーク	ハイライン	サウス・バンク・パークランズ	リュクサンブール公園	シンガポール植物園	王立植物園（メルボルン）
計画・設計・デザイン	テーマ・理念	都市に残された最後の原生自然	大都市の中心にある広大な自然地	都市の中心におけるシンボリックな空間	市民の愛着のこもった歴史的建造物の保全と活用	リバーサイド空間再生による市民の理想的空間の創出	ブルボン王朝時代の宮廷文化の保全と活用	園芸産業振興、都市緑化の推進、人と植物の関係性の啓発	歴史ある植物園の植生を重視した空間景観の保全
	公園デザインコンセプト	原生自然を保全し、活用した計画方針	都市のスプロール防止を図る広大な緑地空間	パブリックアートの伝統を活かした都市のアート空間	摩天楼の中の谷間をイメージした自然景観をなすデザインコンセプト	リバーサイドでの文化的ライフスタイルを実現するデザインコンセプト	ブルボン王朝の宮廷空間の保全	植物の美しさを際立たせる展示とデザイン	植物園の伝統を踏まえた原生植生空間の再現
	公園施設デザイン	自然に影響の少ない外周園路（シーウォール）	池、広場等の新たに人工的に自然景観を作り上げたデザイン	一流の建築家や芸術家による高度なデザイン空間の実現	快適な歩行空間や眺望が得られるような施設計画・デザイン	人工ビーチ等のトロピカルな雰囲気のデザイン	王朝時代の施設や彫刻を保存	各々の植物の特徴を活かした各種テーマパークの整備と、人と植物との関わりの観点に基づいた解説	世界中から集められた植物の生育空間の再現 自撮スポットの設定といった独自の工夫
	施設内容（多様性）	ミニゴルフやテニスなどの運動施設や水族館	歴史のある各種施設（回転木馬、水族館など）	スケートリンクやサイクルセンター等	公園施設内容は限られる	観覧車、人工ビーチ、プレイグラウンドなど	ポニー馬場、ペタンク場、養蜂園など王朝ゆかり多様な施設 豪華な花壇植栽	各種植物毎のテーマパーク	砂漠から熱帯までの多様な環境を展示
公園の実現手法		公共事業	公共事業	多額の民間寄付金収集	市民活動による機運醸成	博覧会を契機にリーディングプロジェクトの実施	公共事業	公共事業	公共事業
周辺とのネットワーク形成	公共交通の利便性	○良い。駅はやや離れてはいるが、市街地に接しており、自転車やバス、マイカーでのアクセスが容易。	◎利便性が高い。 公共交通機関の駅が取り囲んでおり、利便性が高い。	◎利便性が非常に高い。 公園の直下に駅やバスターミナル、駐車場が完備。	◎利便性が高い。 地下鉄の駅から近い。	◎利便性が高い。 鉄道駅が近く、船の便も良い。徒歩でも快適に移動可能。	◎利便性が高い。 地下鉄駅が近い。パリの中心に位置する。	◎利便性が高い。 駅の便が良く、市街地の中心に位置している。	◎利便性が高い。 駅の便は良く、都市のほぼ中心に位置する。
	観光ネットワーク形成：周遊上の位置づけ	観光客や市民が自然を求めて集まってきている。	公園から周辺の博物館等への観光周遊が定着しており、観光周遊の拠点となっている。	シカゴ市の観光利用が増加し、その観光客がミレニアムパークに集中している。	観光地ではなかった地区を新たに観光名所にし、地区全体に観光客を呼び寄せた。	南岸の拠点をなし、ブリスベン川の両岸を周遊する観光ルートを創出した。	パリの観光地の中でも要に立地し、有名な観光地でのため、観光周遊には欠かせない存在。	シンガポールの中では有数の観光地であり、周遊の一拠点となっている。	公園や庭園が都市の中心に多数立地する中で、最も中心に位置し、周遊の要となる。
	観光ネットワーク形成：他施設との連携	特になし	近隣の博物館との情報共有	特になし	特になし	特になし	特になし	特になし	特になし
	周辺市街地との連携	早い時期に公園化が図られたため、都市の中に貴重な原生自然が残った。日常的に自然を求める市民や観光客にとって貴重な観光地である。	黎明期の都市の発展の過程で、早期に中心に自然空間ができたことにより、良好な都市が形成された。	シンボリックな都市の拠点が形成され、都市の中心がはっきりした。	ハイラインと一体になった地区の景観向上と雰囲気の保全を図り、地区の活性化に寄与した。	新たな文化的な都市生活の拠点の整備によって、洪水によって廃れた地区の活性化に寄与した。	パリの街自体が、宮殿等の歴史的建造物を保全して成り立っており、その中心的施設となっている。	研究成果が国是である都市の緑化の技術的根拠を与えている。	歴史が古く、多様な植生展示と決め細かいソフト提供によって、根強いファンを確保している。都市の緑地系統の要に位置する
ソフト・サービス	利用者案内	ガイド付き馬車ツアーによる園内案内	HP による利用者案内	HP による利用者案内	HP による利用者案内	HP による利用者案内	あまりなされていない	HP による利用者案内 各テーマパーク事の解説	多様なガイドシステムによる案内
	イベント	自然を活かしたイベント（マラソン、ウォーキング等）を実施	ニューヨークマラソンなどの NY 市を代表するイベントの開催地	ジェイ・ブリッカー・パビリオンで多数のイベントの開催	テーマの異なる様々なイベントの開催	リバーサイド空間に馴染んだイベントの開催	毎年決まった主催イベントを実施	主に植物と人とをつなぐイベントを開催	この地の自然や歴史を学べるイベントを開催
その他								国民の愛着と誇りのこもった施設	

魅力向上要件の設定

表 1-3 のうち、各事例の魅力要素が挙げられていなかった項目については、改めて各事例の情報から要素の抽出を試みたところ、おおむねどの公園も、先に整理した魅力の分類項目それぞれに要素を当てはめることができた。もちろん、項目によっては、事例ごとに該当する重要度に差があるものの、それでも、各項目は横断的に全ての事例にほぼ当てはまっている。

以上から、海外の先進事例からは、観光振興に資するための公園緑地の魅力向上のために備えるべき要件として、まず下記分類項目のうちの大項目を挙げることができる。

１．計画・設計
　　テーマ・理念、公園デザインコンセプト、公園施設デザイン、公園施設内容（多様性）
２．公園の実現手法
３．周辺とのネットワーク形成
　　公共交通の利便性、観光ネットワーク形成、周辺市街地との連携
４．ソフトサービス
　　利用者案内、イベント
５．その他（公園利用によって醸成された魅力）

上記分類項目の大項目をそれぞれ要件に当てはめると、以下の５つに要件を設定することができる。

要件１	計画・設計（のあり方）
要件２	公園の実現手法
要件３	周辺とのネットワーク形成
要件４	ソフトサービス
要件５	その他（公園利用によって醸成された魅力）

これらの要件のうち、要件１の「計画・設計」については、小項目として「テーマ・理念」、「公園デザインコンセプト」、「公園施設デザイン」、「公園施設内容（多様性）」の４項目が含まれる。表 1-2 に掲載した各要素について、どの公園も「テーマ・理念」、「公園デザインコンセプト」、「公園施設デザイン」が魅力として挙げられている。中には、「テーマ・理念」と「公園デザインコンセプト」の内容が一緒に含まれた魅力や、「公園デザインコンセプト」と「公園施設デザイン」の内容が一緒に含まれた魅力も向けられるが、表 1-3 のように整理すると、全ての公園がこれら三つの要素にうまく当てはまっている。

加えて、各事例において、公園の最も重要な魅力を示している要素は、計画・設計に該当する上記３要素である。例えば、ハイラインでは、高架という歴史的構造物の保全にかかる市民活動

によって「市民の愛着のこもった歴史的建造物の保全と活用」という理念のもとに保全が実現し、専門家によるコンペによって、「摩天楼の中の谷間をイメージした自然景観をなすデザインコンセプト」が決められ、それに基づいて「快適な歩行空間や眺望が得られるような施設計画・デザイン」の実践がなされていった。公園の魅力形成には、これらのどれもが重要な要素である。また、ハイラインの保全によって周辺の建築物の高さが抑えられるなどの措置がとられ、そうした周辺市街地との景観上の一体性も魅力として挙げられているが、本要素はハイライン自体の理念やデザインが成功して初めて活きるものである。これらのことから、要件１として整理した「計画・設計」の中の３つの小項目については、それぞれが重要な要件として整理すべきと考え、以下のように要件１～３として整理した。

なお、要件の名称については、公園のテーマ・理念が、当該都市における公園の位置付けが明確なものである事例がより魅力を際立たせているため、要件の名称は以下のように変更した。また、公園デザインコンセプトについても、テーマや理念に込められている公園の設置目的に合致した事例がより魅力が認められたため、名称を以下のように変更した。なお、表 1-3 では多様な公園施設を含むものが魅力としてみなされたため、公園施設デザインには、多様性等の公園施設の内容を含むものとした。

（１）テーマ・理念　→　要件１　都市における公園の明確な位置づけ
（２）公園デザインコンセプト →　要件２　設置目的に合致したデザインコンセプト
（３）公園施設デザイン　→　要件３　公園施設デザイン（施設内容含む）

以上の検討から、以下の７つの要件を設定した。

要件１　都市における公園の明確な位置づけ
要件２　設置目的に合致したデザインコンセプト
要件３　公園施設デザイン（施設内容含む）
要件４　公園の実現手法
要件５　周辺とのネットワーク形成
要件６　ソフトサービス
要件７　その他（公園利用によって醸成された魅力）

要件の留意事項

前項において、観光振興上の観点から公園緑地が備えるべき要件を７つ導いたが、それぞれの要件の留意事項を導くため、魅力に係る要素をさらに細分化して、表 1-4～表 1-７のように整理した。

これは、各公園の事例に立ちかえって公園緑地の魅力に係る要素を詳細に見て、各要件に係る事項に沿って、より各要素を細分化したものであるが、それぞれの要素は以下のとおりである。

表 1-4 公園設計・デザインにかかる項目

公園デザインコンセプト、デザインに係る内在意味・意義の理解、独自デザイン及びその効果、高質なデザイン実現手法、公園周辺への景観影響、インスタ映えするスポットの存在

表 1-5 施設内容

自然、花、文化性、独自性、エンターテインメント性

表 1-6 周辺とのネットワーク形成

公共交通の利便性、公園アクセス、周遊上の位置づけ、周辺施設との連携方策、都市の観光振興に寄与する公園の機能、都市形成に寄与した公園の役割（一体的な都市景観形成・都市のシンボル形成等）

表 1-7 ソフトサービス

利用者案内、イベント、その他各種サービス等

表 1-4 からは、公園の理念を基底に置くデザインコンセプトに沿って、公園施設のデザインがなされていることが分かる。また、独自デザインへのこだわりも見受けられ、特に特徴の見られたデザイン手法については、それぞれデザイン手法の名称を表中に記載したところである。記載されたデザイン手法は、「自然特性保全活用デザイン」、「都市の自然環境保全デザイン」、「都市のシンボル形成デザイン」、「場の記憶保全デザイン」、「歴史的環境保全デザイン」などの 5 つのデザイン手法である。さらに、デザインの実現手法も、寄付金収集によるもの以外にも、競争性のある選定方式によるものや、リーディングプロジェクトによるものなどの特徴的な公園事例が見られた。

周辺とのネットワークの面では、どの公園も立地条件が良く、アクセスが容易であることが挙げられる。いくら施設内容が優れていたとしても、そこに到達しづらくては利用の促進は難しいため、重要な要素と言えよう。ただし、他の観光施設等との連携が図られている例はほとんど見られなかった。

また、利用者案内の面では、公園 HP の案内は充実しているものの、観光客、それも海外観光客対策はほとんどとられていないことが分かる。海外では、そもそも見た目では外国人かどうか判断できない場合も多く、しかも英語圏の国であれば、海外旅行者が英語を話せば済むため、あまり言語対応への努力をはらう必要性が少ないという事情もあるのであろう。こうした事項を勘案すると、観光振興に資する都市公園の要件を検討するには、我が国に特化した要件もありうる可能性もあることから、補足的に国内事例の情報も加味する必要がある。このため、次章では海外事例の情報の補完する目的で、国内事例の調査を実施している。なお、本章での海外事例の分析結果については、次章での国内事例の調査結果を合わせて分析し、もって、公園の魅力向上のための要件についての検討を進めるものとする。

表 1-4　公園設計・デザインにかかる留意事項

タイプ	公園名	公園デザインコンセプト	デザインに係る内在意味・意義の理解	独自デザイン及びその効果	高質なデザイン実現手法	公園周辺への景観影響	インスタ映えするスポットの存在
Ⅰ	スタンレーパーク（カナダ、モントリオール市）	原生自然を保全し、活用した施設計画（広大な自然体験型公園）	市内に残る貴重な原生自然であり、その保全と活用が公園計画の基底を成す。	原生自然にはほとんど手をつけないというデザインコンセプトによって、利用者が求めるニーズに合致した施設計画となっている。【自然特性保全活用デザイン】	極力自然に負荷をかけないよう、半島という地形を利用して、海沿いの外周に遊歩道（シーウォール）を設けている。公園利用者のおよそ 9 割がこのシーウォールを利用している。	市街地から飛び出した半島上の公園のため、周辺は海であり、隣接地以外からは隔絶されている。	シーウォールでの写真が多い。展望台からの眺めも良い。
Ⅱ	セントラルパーク（米国、ニューヨーク市）	都市の中心に人工的に新たに自然景観を作り上げたデザイン	都市のスプロール化への対応として、人工的に自然環境を作り出している。人工的な整備ではあるが、自然に忠実な設計が目指されている。	マンハッタン島の中心に広大な自然地が現出したことにより、市街地の中心に自然豊かなオープンスペースを有した余裕のある都市が形成された。【都市の自然環境保全デザイン】	建築家オルムステッドによる都市計画によって、市街地のスプロール化に対応するために、マンハッタン島の中央に広大な公園を整備した。	周辺市街地には博物館や美術館が多く存在し、公園を中心に観光がなされている。	ストロベリー・フィールドやグレートローンなどの多くの有名なスポットがある。
Ⅲ	ミレニアムパーク（米国、シカゴ市）	高質なアート性のあるデザイン空間を実現	都市の中心地に残された貴重な空間を、芸術的に都市のシンボリックな空間として創り上げる。	一流の建築家や芸術家のデザインによる建築物や構造物の実現により、都市の中心的なシンボル空間を実現した。【都市のシンボル形成デザイン】	通常の公共事業では標準的なレベルのデザインしか望めないため、ネーミングライトの手法を取り入れて、多額の民間資金を投入することによって高質なデザイン確保を可能にした。【寄付金収集方式】	シカゴ市の摩天楼の中に出現した芸術的空間が、その対比の中で際立っている。	公園内のパビリオンは、どれもインスタ映えする。
Ⅳ	ハイライン（米国、ニューヨーク市）	摩天楼に横たわる谷間をイメージした自然景観を現出するとともに、周辺市街地空間の保全を図った。	廃線敷高架であるハイライン存続への市民の思いが実現化した事業であり、その思いが形として表現された。【場の記憶保全デザイン】	ハイラインを快適に歩きやすいように植栽等がデザインされるとともに、人のたまり場が計画されている。【都市のシンボル形成デザイン】	市民の思いが募金という形で支援の輪が広がり、その人の輪が行政を動かした。寄付金や公共資金によるコンペを通じて、市民の思いが表現されたデザインとなった。【競争性のある選定方式】	ハイラインにマッチするように周辺の建物用途は変更されず、建物の高さも抑えられた。	ハイラインの上自体が格好の撮影スポットであり、周辺の市街地を眺めも良い。
Ⅴ	サウス・バンク・パークランズ（オーストラリア、ブリスベン市）	リバーサイドでの文化的ライフスタイル現出の場として、リバーサイドの景観を活かしつつ、水辺での公園利用が図られる施設デザインを指向した。	リバーサイドにおける市民の理想的なライフタイル現出の場をデザインした。	内陸であるが、人工ビーチを設けてトロピカルなデザインによって非日常的な空間を現出し、人気のスポットとなった。【都市のシンボル形成デザイン】	洪水によって荒廃していた市街地を、ブリスベン国際博覧会会場として整備し、その起爆力を活かして、跡地を公園化し活性化させた。【リーディングプロジェクト方式】	リバーサイドが当該地で分断されていたが、公園整備によってリバーサイドを周遊するルートが出来上がった。	人工ビーチをはじめ、リバーサイドとしての公園の至るところが撮影スポットとなりうる。
Ⅵ	リュクサンブール公園（フランス、パリ市）	ブルボン王朝の宮廷空間の保全とともに、それらの施設を活用して宮廷文化ゆかりの利用を図っている。	ブルボン王朝の宮殿であり、世界史的な歴史の舞台でもあった。その事実を受け止め、後世に引き継ぐことが空間デザインの根底となっている。	新たな近代的デザインを施すことなく、往時の宮殿の形状の保全に徹している。【歴史的環境保全デザイン】	現存する施設の保全と適正な管理、また、オランジェリー（冬用果樹温室）などの施設も、本来使われていたような使用方法がなされている。	もともとパリの旧市街地内に位置し、周辺街並みと調和するとともに、パリの観光の要に位置する。	宮殿建物や数多くある彫刻など、撮影スポットには事欠かない。
Ⅶ	シンガポール植物園（シンガポール、タングリン市）	植物と人との関係性を重視し、植物の美しさを際立たせる展示とデザインが図られている。	植物と人の関わり合いが理解しやすいデザインが採用されている。	ジェイコブ・バラス・チルドレンズ・ガーデンのような新しい施設や、ジンジャー・ガーデン等のテーマガーデンにおいて、独自のデザインが見受けられる。	植物に熟知した知見を基に、植物を軸にした高度な展示デザインを実現させている。	緑化技術の底支えをし、都市全体の緑化振興に寄与している。	園内のテーマガーデンを始めとして撮影スポットは多い。
	メルボルンの王立植物園（オーストラリア）	植物園の伝統を踏まえた原生植生空間の再現がなされている。	歴史的に皇室の植物園として位置づけられた公園であり、その名にふさわしい施設整備がなされている。	様々な自然条件における植生を、園内いたるところに配置している。	植物の生育環境を再現して、原生自然を楽しめるデザインがなされている。	市内中心部の緑地を構成する重要な緑地である。	各々の園地が撮影スポットであり、自撮りコーナーまである。

表 1-5　施設内容に係る留意事項

タイプ	公園名	自然	花	文化性	独自性	エンターテインメント性
Ⅰ	スタンレーパーク（カナダ、モントリオール市）	園内はほとんどが樹林であり、手つかずの自然が残る。ビーバーレイクという大きな池も存在する。	樹林や池を貴重にした公園であり、天然の花々が季節に応じて咲く。	シーウォールの入り口から 2.5km ほどのところに、かつて先住民（7 つの部族）の居留地だったことを示すトーテムポールが立てられている。トーテムポールには熊やシャチや人などが彫られているが、それらのモチーフの中には、各部族を象徴するものが含まれている。	一部に水族館等の施設整備はなされているものの、手つかずの自然を残すということが本公園の特徴である。	バンクーバー水族館は、オルカやイッカクなどの北方海洋哺乳類の飼育実績がある他、園内移動用乗り物として、パークトレインや馬車ツアーがある。
Ⅱ	セントラルパーク（米国、ニューヨーク市）	人工的に造られた自然ではあるが、園内は樹林と芝生、池が基本となっている。池の護岸は自然の岸辺に近い形状をなし、野生の植生の復元が可能になっている。	シェイクスピア・ガーデンなどのテーマゾーン内に花木や草花が多く植えられている。	園内の施設は、それぞれ 150 年近くに及ぶセントラルパークの歴史を刻んだものである。19 世紀に設けられた、ベセスダ噴水、コンサーヴァトリー・ガーデン、ベルヴェデーレ城などの施設も存在する。	公園内では天然自然の中にいるような錯覚を覚え、都会的な景色や喧噪の中のオアシスとして機能する。	セントラルパーク・コンサーバンシーが多くのイベントを開催している。
Ⅲ	ミレニアムパーク（米国、シカゴ市）	駐車場などに使用されていた都心の空地を活用した 10ha 程度の公園であり、大規模な自然が再現されているわけではない。	各建築物やパビリオンに外構的に植栽がなされており、その中で花の植栽にも配慮されている。	シカゴに古くからあったパブリックアートの伝統を活かして、芸術をテーマにした公園にするという企画された公園であり、コンサートをはじめとしたイベントが昼夜を問わず開催され、文化発信の拠点となっている。	都市の顔としてのシンボリックな空間の現出によって、観光客増を目指すという戦略に基づいている。	象徴的なパビリオンが整備され、2000 年代においてシカゴで最も集客力のある施設となった。
Ⅳ	ハイライン（米国、ニューヨーク市）	廃線高架上の空間的制約のある空間ではあるが、摩天楼内の谷間としてイメージできるような植栽がなされている。	緑化の工夫はされているが、花はあまり植えられてはいない。	毎月いくつかのイベントが異なったテーマで開催されている。	廃線敷高架という特殊空間を、全くの一般市民がコーディネートして公園化した稀有な事例	ハイラインでは各種のイベントが豊富に実施されている。
Ⅴ	サウス・バンク・パークランズ（オーストラリア、ブリスベン市）	ブリスベン川の南側の河畔に位置し、河川と一体となった景観を成す。	トロピカルなイメージの花が植えられている。	サウス・バンクには芸術や音楽の学校が多く、文化をリードする地区である。また、市民の最高のライフスタイルを実現する場として人気が高い。	万博跡地を活用して、地区の活性化を図った事業である。	毎年多くのイベントが開催され、週末にはマーケットも開催される。
Ⅵ	リュクサンブール公園（フランス、パリ市）	王朝時代の宮殿の庭であり、自然物ではないものの、多くの樹木が植えられ、良好な自然地を形成している。	宮殿周囲をはじめとした花壇の花は、年 3 回植え替えられている。	宮殿や庭園自体が芸術であるが、園内には著名な芸術家の手による彫刻が多数据えられている。	宮殿をそのまま国会議事堂の敷地として利用し、その庭園部を一般に開放している。	主催者イベントは年に数回同じテーマのものを実施している。持ち込みイベントは多い。
Ⅶ	シンガポール植物園（シンガポール、タングリン市）	園内には 1 万種以上の植物が植えられ、特に歴史的に価値のあるヘリテッジツリーも 41 本ある。	植物園として多種多様な花が展示されているが、ランやジンジャーの花は圧巻である。	植物をテーマにしつつも、いかに楽しみながら、植物にまつわることが学べるかという姿勢に基づいて、各種テーマパークが設けられている。	ゴムやラン研究を主目的とした歴史を持つが、約 160 年という長い歴史が市民の植物園への愛着を醸成している。	イベントは、園内を案内するツアーが主流であるものの、一方でコンサートといった大人数の集客イベントも開催される。
	メルボルンの王立植物園（オーストラリア）	世界中から 8500 種に及ぶ植物が集められ、園内に展示されている。	植物園として多様な花々が展示されている。	「Royal」と冠された植物園のあり方そのものが文化である。歴史のある植物園らしく、世界中から集めた植物を、原生植生環境を再現して展示している。	世界中から集められた植物が、それらの生育環境が理解できるように展示してある。	ムーンライトシネマ、自撮りツアー、ボランティア出前ツアー、園内探検ツアー、船遊ツアーなど、利用者のニーズに沿った様々な取り組みがなされている。

表 1-6　周辺とのネットワーク形成に係る留意事項

タイプ	公園名	公共交通の利便性	周遊上の位置づけ	周辺施設との連携方策	都市の観光振興に寄与する公園の機能	都市形成に寄与した公園の役割 （一体的な都市景観形成・都市のシンボル形成等）
Ⅰ	スタンレーパーク（カナダ、モントリオール市）	○良い。駅はやや離れてはいるが、市街地に接しており、自転車やバス、マイカーでのアクセスが容易。	観光客や市民が自然を求めて集まってきている。	特になし	日常的に自然を求める市民や観光客にとって貴重な観光地である。	早い時期に公園化が図られたため、都市の中に貴重な原生自然が残った。
Ⅱ	セントラルパーク（米国、ニューヨーク市）	◎利便性が高い。 公共交通機関の駅が、公園を取り囲むように存在する。	マンハッタン島の中央に位置し、観光客が周遊する際の拠点となっている。	公園内外の近隣の博物館との情報共有	日常的に自然を求める市民や観光客にとって貴重な観光地である。	黎明期の都市の発展の過程で、早期に中心に自然空間ができたことにより、良好な都市が形成された。
Ⅲ	ミレニアムパーク（米国、シカゴ市）	◎利便性が非常に高い。 公園の直下に駅やバスターミナル、駐車場が完備。	シカゴ市の観光利用が増加し、その観光客がミレニアムパークに集中している。	交通結節点上に公園を設けることにより、周辺との連携が容易となっている。	新たな観光拠点の登場で、観光地としては陳腐化していた摩天楼から公園に観光客が移った。シカゴ市全体の観光客も増加した。	都市の交通結節点と都市のシンボルを新たに都市の中心に設けたことにより、都市の中心性が際立った。
Ⅳ	ハイライン（米国、ニューヨーク市）	◎利便性が高い。 地下鉄の駅から近い。	NY 市内では観光地ではなかった地区に、新たに観光名所を創出し、地区全体に観光客を呼び寄せた。	特になし	それまで観光地として見られていなかった地区を、一躍観光地にのし上げ、新たな観光需要を地区全体に創出している。	ウェスト・チェルシー地区全体の保全のシンボルとして機能し、地区の景観向上と雰囲気の保全を図り、地区の活性化に寄与した。
Ⅴ	サウス・バンク・パークランズ（オーストラリア、ブリスベン市）	◎利便性が高い。 鉄道駅が近く、船の便も良い。徒歩でも快適に移動可能。	ブリスベン川の両岸を周遊する観光ルートを創出。南岸の拠点をなす。	特になし	洪水によって廃れた街に公園ができたことによって、川の両岸沿いを巡る観光周遊が図られるようになった。	洪水によって廃れた街に、新たな文化的な都市生活の拠点かつ観光拠点の整備によって、町の活性化に寄与した。
Ⅵ	リュクサンブール公園（フランス、パリ市）	◎利便性が高い。 地下鉄駅が近い。パリのほぼ中心に位置する。	パリの観光地の中でも要の位置に立地し、観光客にとって周遊する上では欠かせない存在。	特になし	17 世紀のブルボン王朝ゆかりの有名な観光地であり、周遊観光の拠点である。	都市自体が宮殿などの歴史的建造物を中心に成り立っている。
Ⅶ	シンガポール植物園（シンガポール、タングリン市）	◎利便性が良い。 駅の便が良い。	シンガポールの中では有数の観光地であり、周遊の一拠点となっている。	特になし	シンガポールでは、歴史的にも国を支えてきた施設であり、その理念・意義が理解されている人気の観光地である。	国民の愛着と誇りのこもった施設であり、かつ研究成果が国是である都市の緑化の技術的根拠を与えている。
	メルボルンの王立植物園（オーストラリア）	◎利便性が高い。 駅の便は良く、都市のほぼ中心に位置する。	公園や庭園が都市の中心に多数立地する中で、最も中心に位置し、周遊の要となる。	特になし	歴史が古く、多様な植生展示と決め細かいソフト提供によって、根強いファンを確保している。	都市の緑地系統の要に位置する。

表 1-7　ソフトサービスに係る留意事項

タイプ	公園名	利用者案内	イベント	その他各種サービス等
Ⅰ	スタンレーパーク（カナダ、モントリオール市）	・馬車ツアーではガイドによる詳しい説明を聞くことができる。 ・案内情報を記したパンフレットをネットで公開、紙ベースのものは空港、フェリーターミナル、旅行センター、ホテル、所管の公園等で配布	各種のフェスティバルやマラソン、ウォーキング大会などを含めて、年間平均 66 ものイベントが開催されている。スタンレーパーク 125 周年記念行事も企画されている。	・自然の大切さやその保全を学ぶ組織として、スタンレーパーク・エコロジー・ソサエティがある。 ・2014 年にトリップ・アドバイザーの人気 No.1 に選定された。
Ⅱ	セントラルパーク（米国、ニューヨーク市）	広大な公園の維持管理のために寄付金を主体としたセントラルパーク・コンサーバンシーが運営管理を行う。本コンサーバンシーの HP に公園案内がある。	ニューヨークマラソンなどのニューヨーク市を代表するイベントが開催されている。	セントラルパーク・コンサーバンシーの主要な仕事が寄付金集めであるが、寄付者にグッズを提供するなどの努力がはらわれている。
Ⅲ	ミレニアムパーク（米国、シカゴ市）	シカゴ市の HP や各パビリオンの HP で利用者案内がなされている。	イベント案内の HP では、毎日のようにジェイ・ブリッカー・パビリオンでの多くのイベントが開催されていることが分かる。	寄付金を集めるために、高額寄付者の名前を刻んでいるモニュメント（リグリー・スクウェア）もある。
Ⅳ	ハイライン（米国、ニューヨーク市）	公園を運営管理する NPO（フレンズ・オブ・ハイライン）の HP で利用者案内がなされている。	HP には開催されるイベント等の情報が記されている。	運営管理を行うフレンズ・オブ・ハイラインは、ハイラインの事業化に貢献のあった若者 2 人が中心となった組織である。
Ⅴ	サウス・バンク・パークランズ（オーストラリア、ブリスベン市）	HP で利用案内がなされている。	HP には開催されるイベント等の情報が記されている。	万博を契機に、荒廃した地区を活性化するために設けられた公園であり、本公園によって川の両岸にわたる周遊がなされるようになった。
Ⅵ	リュクサンブール公園（フランス、パリ市）	元老院職員（国家公務員）の庭師が公園の管理を行っている。本来の機能が元老院の運営であるため、通常の公園ほどは利用者案内はなされていない。	毎年、決まった主催者イベントが実施されている。	全て元老院予算（国家予算）で運営管理費はまかなわれている。
Ⅶ	シンガポール植物園（シンガポール、タングリン市）	植物園の HP に利用者案内が記されている。ボランティアによる植物園ガイドが案内を行う。	主に植物と人とをつなぐイベントを開催している。ボランティアによる植物園ガイドや各種イベントは、サービス向上策に位置付けられている。	シンガポールは都市の緑化が国是であるが、その緑化技術の根拠を常に本植物園は提供し続けてきている。つまり、その下支えによってシンガポールは国際都市としてのクオリティを確保していると言える。
	メルボルンの王立植物園（オーストラリア）	植物園の HP に利用者案内が記されている。フリー・ガイディッドツアー（熟練ガイドによる無料ツアー）も開催されている。	実に様々なきめ細かいツアーやイベントが開催されている。園内の自然景観をいかに堪能してもらうかという姿勢が覗える。	植物が生育している自然環境をなるべく忠実に再現した展示がなされており、歴史ある植物園らしい佇まいを見せている。